

# 蜜のあわれ

室生犀星

青空文庫



一、あたいは殺されない

「おじさま、お早うございます。」

「あ、お早う、好いご機嫌らしいね。」

「こんなよいお天気なのに、誰だつて機嫌好くしていきや悪いわ、おじさまも、さばさばしたお顔でいらつしやる。」

「こんなに朝早くやって来て、またおねだりかね。どうも、あやしいな。」

「ううん、いや、ちがう。」

「じゃ何だ。言つてご覧。」

「あのね、このあいだね。あの、」

「うん。」

「このあいだね、小説の雑誌巻頭にあたいの絵をおかきになつたでしょう。」

「あ、画いたよ、一疋びきいる金魚の絵をかいた。それがどうしたの。」

「あれね、とてもお上手だったわ、眼なんかぴちぴちしていて、とてもね。本物にそっくりだったわ。」

「頼まれて生れてはじめて絵というものを画いて見たんだよ。本当は絵だか何だか判らないがね。」

「あたいにも、そのうち一枚画いていただきたいわ。」

「絵は画こうとしたって却々なかなか、画けるものではないよ。君から見ると似ているかどうかね。」

「よく似ていたわ、それでね、あれから後に、一週間程してから、雑誌社からお礼のお金が書留で着いたでしょう。」

「これも生れてはじめて画料というものを貰もらったのだが、それがどうかしたかね。」

「どれだけいただきになったの。」

「文章が一枚半ついていてね、合わせて一万円貰った。」

「おじさまはそれをわたくしにね、正直に仰おっしゃ有あらなかつたわね。幾ら来たってこともね。」

「金魚にお金の話をしたって、どうにもならないじゃないの。」

「だって、あれ、ほんとうは、あたいのお金じゃないこと、あたいをお画きになつたんだもん、あたいにくださるとばかり、そうおもっていたわ。」

「何だか僕もそんな気がしないでも、なかつたんだけど、」  
「でね、おじさま、それについてね。」

「あ、」

「もうお金、だいぶ、おつかいになつた？」

「半分つかつたけれど、まだある。」

「何に半分、おつかいになつたの。」

「千五百円の玉露を百目買ったし、雉子羽根きじのはたきを一本と、

赤玉チーズを一個買った、……」

「あたいには、とうとう、何も買ってくださらなかつたわね。」

「君なんかのことは、まるで、わすれていた。」

「おじさまはずるいわね。あれ、本当をいえばあたいのお金じゃないの。」

「そういうことになるかね。きみを見て画いただけで、それがきみのお金になるものかな。」

「あたい、いつ下さるかど、窓の方を毎日のぞいていたのよ、で、ね、あと半分のお金、いただきたいわ。」

「一たいきみは何を買うつもりなの、」

「お友達の金魚をたくさん買ってほしいのよ。」

「あ、そうか、遊び友達がいるんだね、それは気がつかなかつた

。」「

「それから金魚餌という箱入の餌がほしいわ、かがみのついてい  
る、美しい箱なのよ。」

「かがみっていうのは錫すずの紙の事だろう、あれはかがみになりま  
すかね。」

「水にぬれるとぴかぴかして、かがみみたいになるわよ、それか  
らね、めだかをたくさん買うの。」

「そんなめだかどうするんだ。」

「めだかの尾がとてもおいしいんですもの。毎日少しずつかじつ  
てやるの。」

「尾をかじっては、めだかが可哀そうじゃないか。」



「齧<sup>かじ</sup>つてもかじつても、目高の尾というものは、すぐ、生えてくるものよ、だから、可哀そうなことないわ。」

「めだかの尾はたとえば、どんなあじがする。」

「ぬめつとして口の中でも生きていて、ひりひりうごいているわ、とても、おいしいのよ。」

「ざんこくだね。」

「おじさま、早くお金出してよ、あたいのお金なのに、出ししづらないですよ。早くさ。」

「じゃ、千円札で五枚、それに剩<sup>あま</sup>ったこまかいのが、百円札と銀貨を合わせて総計五千九百円になる。」

「ええ、これで決算済みよ、それからついでに、外にもっと細か

いのもいただきたいわ。」

「銅貨で重くていいか、」

「かまいません、それからおじさま、あたい、齒のお医者様に行きたいんですから、別にその方のお金も頂戴。」

「金魚が齒医者にかかるなんて聞いたこともないが、齒がどう痛い。」

「このあいだね、慌てて、石を嚙<sup>か</sup>んじやった、がりがりって。」

「あわてるからだよ、たべものは一遍そつと口にさわって見てから、食べるようにするんだね、齒はいたむの。」

「痛いわ、骨にひびくわ。」

「骨にひびくって、骨につて背骨の骨のことか。」

「お背中の中、骨なのよ、おじさま、いま骨の話をしてからおじさまの顔色が、へんに変って来たわね、それ、どうしたのよ。」

「僕はまだ金魚の骨というものを見たことがないんだ、金魚に背骨があるかないかも昔からわすれていた。人間で金魚の骨を見た人が何人いるかしら、全くたいへんなことを忘れていたものだ。」

「どうしてそんな、あたいた達の骨が見たいの。」

「見たいような見たくないような、また、怖いような気もするんだ。よく考えると人間は誰でも、いろいろな骨は見て来たけれど、まだ金魚の骨だけは見た人間は滅多にいない、たとえばきみの優しいからだに骨があるとは、どうにも考えられないことだ。」

「ぐにやぐにやだと仰有るの。」

「あんな針みたいな骨があるなんて、きみの顔を見ていたって、想像もつかないことだからね。」

「死んだら、かいぼうすれば、いいじゃないの。」

「人間は金魚の骨だけは見たくないって、皆さんがそう言っているんだよ。可哀そうだから。」

「あたいもまだ見たことないわ、じゃ、あたい、そろそろお友達を買いにいつてくるわよ、黒いのや斑ぶちなのや、それから、めだかも。」

「行って来たまえ、自動車に気をつけてね。」

「ええ、お金持になれて、とても今日は嬉しいわ。」

「ハンド・バッグを掏すられないように気をつけておいで。」

「はい、行ってまいります。あ、いいお天気だなあ。」

「水道の水は飲むなよ、げえになるからなあ。」

「はい、すぐかえるから、おじさま、おとな温和しくして待っていていらっ  
しやい。」

「よしよし、……」

「おじさまの好きな、いしごろも、買って来てあげるわ。」

「それから金こんぺいとう平糖もね、ちいちゃいのは頬ばるのに面倒だから、  
鬼みたいな大粒のやつがいいよ。」

「赤いのや青いのがまじ雑っている、あれでいいんでしょう。どのく  
らいいます。」

「そうね、三百円くらいいるな、子供にわ頒けてやることもあるか

らね。」

「そのお金、先刻いただいた分とは、べつにいただかなきゃ。」

「そうか、ほら、これでいいね。なかなか抜からないね、きみは。」

「だってあたい、いろいろ考えてつかうから、おじさまの金米糖のお金は出せないわ。石ごろもの分は、あたいのおみやげにするけど。」

「有難う、たすかった。」

「ふふ、では行ってまいります。」

「道くさをしないで、ちゃんと、お八ツまでにかえつて来るんだよ。」

「はい、」

「うなぎや鯖さばを店さきで見ていると、さかなやさんに捕まって、売られてしまうぜ。」

「はい、はい。」

「ただいま、——あ、怖かった、も、ちよつとで誘拐されるところだった。」

「どうした、真青な顔をしているじゃないか。ふるえてさ、きみらしくもないね。」

「おじさま、お水を一杯ちようだい、こんな怖い事はじめてよ、呼吸もつけないわ。」

「ほら、水だ、ぐつと飲んで気を落ちつけて、何が怖かったかということを話すんだよ。」

「あ、美味<sup>おい</sup>しい、もう少し頂戴。先刻のクロロフィルの入った水よ  
りか、よつぽど、美味しい。」

「何だクロロフィルなんて。」

「あたいね、おじさま、途中で思い出して丸ビルまで急に行つて  
みたのよ、お天気は上々だしね。」

「丸ビルまでか、驚いたやつだな、そんな派手な恰好をして。」

「此間からあたい、歯が痛い痛いって言っていたでしょう、だから  
雨がふるとこまると思つて、七階のバトラー歯科医院まで思い  
切つて行つちやった。」



「彼処はきみたちの行く歯科ではないよ、きみたちは蟹科かにかに行けばたくさんなんだ、」

「失礼なおじさまね、蟹科は抜歯ばかりで、歯の技術はてんでだめなのよ、おじさまは何時も歯がお悪いくせに、何もごぞんじないんだ。」

「道理で永いお使いだと思っていたんだ。だってバトラーさんは時間ぎめだから、ふいに行っても療治してもらえない筈じゃないか、幾日の何時という時間を貰わなければならぬんだが、」

「そこがあたいの腕うでのあるところなのよ、ちゃんと療治していたでいて、疼うずきもとうに治つちやつた。」

「どうしてそんなウマイことをしたんだ。」

「黒の眼鏡をかけた、英語のぺらぺらのおばちゃんがいらっしゃるでしょう。」

「あ、いるいる、きょうもいたかい。」

「だからあたいたい、おばちゃんに歯がいたくて死にそうだと、たのんじやつたの、半分泣顔して見せてやったの。」

「そしたら、」

「そしたらセンセイのところにあたいを連れて行って、この子の歯の中に蟹の子がいるそうですから、つまみ出してくださいと頼んでくださいました。センセイはピンセットの先に、とうとう十二足の蟹の卵を捜して、つまみ出して下すつたわよ。」

「十二足とはたいへん居たものだな。」

「そして一応抜歯してから、歯は入歯しなければならいんですつて。」

「金魚のくせに入歯するなんて変じゃないか。」

「あたいの歯は二千円くらいだけど、こんどのおじさまの歯は金と白金とをまぜてつくるんですつて、でなきや、どんなに叮嚀ていねいに作っても、おじさまの癩癩玉は、いつも入歯まで噛みくだいておしまいになりますと、センセイがおわらいになって仰有つていらつしたわ。」

「かかるだろうなあ。」

「そつと聞いたたら八万六千円もかかるそうだわ、だから、あたい、べそを掻いたような顔をして見せて、着いたばかりの原稿料の小

切手を置いて来たわ、これ内金でございます、なんしろおじさまは貧乏ですからと申し上げていたわ。」

「よけいなことは言わないものだ。」

「それからあたい、治療の椅子に腰かけていると、うがい器にどんな仕掛になっているのでしょうか、漂白硝子器に水がくるくる舞いをして、しじゅう清潔なお水が走って流れているんです、それを見ていると先刻からずっと、喉が乾いて尾も頭もからからになつて、していることに気づいたの、我慢がなくなつて、助手さんすきの隙を見てね、コップの水を飲んでしまった。飲んでから気がついて青くなつちやつた、あれみな水道の水なんですもの、だから慌てて口をもがもがしたけれど、もう遅かつたわ、げえになりそ

うになっちゃったんです。」

「だから出しなにあんなに、水道の水は飲むなど、言っておいたじゃないか。」

「あたい、すぐ助手さんと呼んだわ、そしてこのコップの水を飲んだんですけれど、これ、毒でしょうかしらときくと、いいえ、召し上つてもかまいませんと仰有ったから、でも、金魚には水道の水は毒でしょうと聞きなすと、そうね、金魚にもお毒ということはないでしょう、どうして金魚の事なぞいまどき仰有るんですかと言われたので、あたい、すっかりあか赧くなつて家にたくさん金魚を飼っているものですから、ここにあがっても、いまごろどうしているかと心配でならないんでございますという、助

手さんは何てお優しいお嬢様でしょうというの、おじさま、あたしも外に出ると大したお嬢様になって見えるらしいわね、驚いちゃったでしょう。」

「ちつとも驚かないよ、きみが令嬢でなかったら、令嬢らしい者なんて世界に一人もないよ。」

「おじさまもそう思ってくれるかな、嬉しいナ、ところで助手さんはこのお水にクロロフィルというお薬がはいっているから、金魚の鱗にも効く場合がありますと仰有ったので、あたい、もう少し頂いたわ、クロロフィルって青い藻みたいに、美しい色をしているお薬なんです。」

「僕の胃腸薬なんかに、クロロフィルが入っていて、散薬だけ

れど、まるで緑色の薬なんだ。」

「おじさま、こんどそのお薬少し頂かしてね。」

「何にするの。」

「お腹があまり大きくふくれているから、服のむとなおらないかと思うの。」

「その内頒けてあげるよ、併し金魚に効くかどうか、金魚屋さんによく聞いてからにするといいよ。いまどきの薬の事だから、間違うとたいへんな失敗になるからね。」

「それはよく聞いて頂かないとこまるわね。金魚屋さんて金魚のお医者様みたいだから、何でも聞くと知っていらつしやるわ。」

「うっかり薬なぞ服まない方がいいよ。」

「それから療治をして控え室に戻ると、大きな西洋人が二人待ち合わせていて、二人とも睡っていたわ、あたいみたいに赤い顔をしていらっしったものですから、あたいまで睡くなっちゃった。

あたい、このごろね、赤い雑誌の表紙の色を見ただけでも、すぐ睡気がして来るのよ。」

「金魚というものは泳ぎながら、みんな何時でも睡っているんだ、口をとじたままでね。」

「それからタクシーに乗ったら、<sup>マツチ</sup>燐寸一つ貰いました。お釣錢を貰おうとしたら、手を握られちゃった。言い分が<sup>きざ</sup>気障じやないの、お嬢さまのおてては何ておつめたいんですと来た、あたい怖くなつて、さよならと言って降りたわ。」



「きよならなんて言わなくともいいんだよ、手をにぎられたくせに。」

「それからがたいへんなことが始まったのよ。」

「どう、たいへんなことっていうのは。」

「新橋で省線に乗ったでしょう、乗るとすぐあたいの肩に手をかけて、何処に行つて来たんだと、青っぽい服を着た若い男の人がいうの、あたい、こんなにちんぴらでしょう、肩にらくに手を置けるんですもの、丸ビルの歯医者さんまで行つたんだと答えたら、どちらに帰るんだといったから、大森までというと、僕も大森に行くんだから下車したら五分間つきあってくれというの、あたい、きゆうに怖くなっちゃって、その人のそばを離れて後ろ側の吊り

皮にかわっちゃったの、そのとき、つい失礼しますと言っちゃった。」

「ばかだなあ、そんな時に失礼しますなんて言う奴があるかね。それからどうしたの。」

「そしたら次の駅につくと、すぐあたいのそばにまた寄って来て、たくさん乗客ひとのいる中でも平気でいうんです。歯医者にかかっているなら度たび通わなければならぬから、この次はいつ行くんだ、その日をいつてくれれば、丸ビルで待ち合わせようじゃないかというんです。あたい、もうその人がとても急に怖くなってしまった。こんな人のことをぐれんたいというんだなと思ひ、がたがたハンド・バッグを提げている手がふるえて来たわ。」

「一さい口を利かなかった方がよかつたのだ、きみは一々返事をしたことがおぼこに見えたんだよ、何処までもきみはこどもくさいからね。」

「それでね、大森に降りたら、白木屋の入口で待っているというの、あたい、もう黙って返事をしなかつたわ。そしたら、待つか待たないか返事をしろと迫るの、あたい、もう誰かにたすけて貰おうかと思つたけど、例の肩の手がはなれないんですもの、だから、こんどは出口の方に行つてみると、すぐついて来たわ、そのついて来方があんまり早いもんだから、乗客は誰もふしぎそうに見る者は一人もいないんです。硝子戸ガラスどに顔をくつつけていると、硝子が曇っちゃつて、あたいの心と同じ色になっちゃつた。」

「それから男はどうしたい。」

「大森に着く前にもう一ぺん念を押し去っていったわ、白木屋の前に来なかつたら、ただじや置かないと、省線に張り込んでいるからそう思えと言つたわ、あたいたい、下車するとバスの停留場まで趨はしつたわ、うしろ向くと捕つかまえられると思つてがたがた趨はしつた。」

「人もあろうに僕の家の人にも、そんな男の手が伸びるなんて、あきれたもんだ。まだ怖いかね。」

「おじさまにお話したら、ブルブルが取れちやつた、あたいたい、そんなにうきうきして見えるかしら、それが気になるのよ。」

「きみの少女くさいところを狙つたのだろうが、この狙いは、ねそこねらい損そこねなんだね、きみなんかのように少女くさいのは却々手にの

りそうで、いざとなると、ぴよんと跳ね上つてしまつて草臥れも  
うけさ。」

「あたい、もう丸ビルなんかに行かないわ、もうこりごりよ、け  
ど、おじさまの顔みていると、だんだん怖いのが剥がれて行くわ。  
よつぽど、おじさまの名前を言つてご用があつたら、お家に来て  
頂戴と言おうかと考えたけど、お名前を出すのが悪いと思つてや  
めといたわ。」

「名前なんか出すのはよしなさい、言わないのが、りこうなんだ  
。」

「じゃ、あたい、りこうだったわね。」

「自然にふせぐ手をきみは知っていて、それを自分で考えないで

やっていたことは、やはり身をまもることを知っていた訳なんだ。  
」

「おじさま、」

「なに。」

「あたい、お腹がきゆうに空いちやった。お茶一杯飲まないでいたんですもの。」

「では麩ふでもおあがり。」

「あたい、麩ふなんかぐにやぐにやしていや、塩からい、わかさぎの乾からぼし干ぼしがつつきたいんですもの、くたびれちやった。」

「じゃ乾干をおたべ。」

「あ、美味しい、おじさま、井戸水を汲んで来てちようだい、柔

らかい水にじつと、少時しばらく、かがみ込んで見たいわ。」

「よしよし、ほらおいしい井戸水だよ。」

「藻も少しいれてよ、古いのは棄てちゃって、ごわごわした生きのいいのがいいわ。あ、わすれていた。どう、この菌は立派でしょう。」

「あつてもなくてもいいのに、おしやれだね、きみは、」

「だって晩にはしくしくと何時までも疼いて、どうにも手がつけられないんですもの、おじさまがそんなに冷淡なこと仰有ると、化けて出るわよ。」

「金魚が化けられるものかい。」

「あたね、ときどきね、死んだら、も一度化けてもいいからお

逢いたいわ、どんなお顔をしていらっしやるか見たいんですもの。あたい達の命つてみじかいでしょう、だから化けられたら、何時か化けて出てみたいと思うわよ。」

「まだまだ死なないよ。夏は永いし秋もゆつくりだもの、冬は怖いけれど。」

「冬は怖いわね、からだの色がうすくなつちまうし、おじさまはお庭に出なくなるし、ねえ、冬んなつたらお部屋にいられてね。」

「入れて大事にしてやるよ、暖かい日向にね。そしてわかさぎの乾干をやるよ。」

「鏡のついた箱入の餌もね、こまかく叮嚀にかなづちで砕いて、」  
「溝川のみじんこ・みみずもさがして歩くよ、きみはあれが好き



だから。」

「あ、嬉しい。おじさまは、何時も、しんせつだから好きだわ、弱っちゃった、また好きになっちゃった、あたいつて誰でもすぐ好きになるんだもん、好きにならないように気をつけていながら、ほんのちよつとの間に好きになるんだもの。此間ね、あたいの友達に男の人に、一日じゅうお手紙を書いていたわ、人が好きになるということは嬉しいことのなかでも、一等嬉しいことでございます。人が人を好きになることほど、うれしいという言葉が突きとめられることがございません、好きという扉を何枚ひらいて行っても、それは好きでつくり上げられている、お家のようなものなんです、と、そのかたの文章がうまくて、後のほうでしめく

くりをこんなふうにつけてありました。わたくし旅行先でお菓子を沢山買って、それを旅館に持ってかえって眺めていると、誰が最初にお菓子を作ることを考えたのでしょうか、そんな莫迦<sup>ばか</sup>みたいなことも書いてございました。」

「きみはいくつになる。」

「あたい、生れて三年経っているの、だから、こんなにからだが大きいの。」

「人間でいうと二十歳くらいかな、頭なぞがちりしているね。」

「ええ。でも、おじさま、人を好くということは愉しいことでございませうという言葉は、とても派手だけれど、本物の美しさでござうざしているわね。」

「それ以上の言葉は先ず見つからないね、女の人言葉としては正直すぎているくらいで、誰でもそうは書けないものがあるね、大胆な表現でしかも極めて普通なところがいいね、どんな人なの。」

「逢つてみたいの。」

「きれいな人かどうか、それが気がかりなのさ。」

「それはそれはきれいな人よ。せいは低いけど。」

「何をしている人なんだ。」

「或る雑誌の編集をしている方、海棠夫人という名前がついている方なの。」

「その手紙を貰った相手は誰。」

「歌舞伎俳優だったのだけれど、いまは、たまにしか出ない名のある俳優なのね、おじさまはきつと名前をいえばお判りでしょうけど、あたい、お友達から口どめされているから、言えないわ。

けどね、人を好くということは嬉しいことでございますというの  
は、とても、たまらないよい言葉ね、人を好くということは、お  
じさま、言つてごらん遊ばせ。」

「いやだよ、いい年をしてき。」

「ね、一ぺんこつきりでいいから言つて見て頂戴、男の人の口か  
らそれを聞いてみたいんだもの、人を好くということは嬉しいこ  
とでございます、……」

「人を好くということは、……」

「愉しいことでございます、と、息をいれずにひと息に仰有るのよ、おじさまつたら、齒がゆくてじれつたいわよ、人を好くということは愉しいことでございますと言うのよ。」

「人を好くということとは、……」

「また吃どもつたわね、ずっと一氣につづけるんだと言っているじゃないの。」

「人を好くということは、……」

「すぐ、あとを言いつづけるのよ。判らない方ね。」

「僕にはとてもいえない、かんにんしてくれ。」

「何て年よりのくせにはにかみやだろう、もう言わなくてもいいわよ。」

「慍おこったね、じゃ言うよ、人を好くということは人間の持つ一等級すぐれた感情でございます。」

「ちがうわね、勝手に言葉を作ってはだめじゃないの、人を好くということとは、ほら、早くさ。」

「人を好くということは、……」

「何てじれったいおじさまでしょう、それで小説家だの何のつて可笑おかしいわよ、あたいの言葉の終らない前に続けるのよ、人を好くということとは、なのよ、あら、黙っちやった。」

「……………」

「言わないの、早くさ。」

「僕はだめだ、きみひとりで其処で何度でも言ってくれ、僕はば

かばかしくなるばかりだ。」

「わかさがないのね。」

「何も無いよ、すつからかんだよ、好きでも口にはいえない言葉というものがあるもんだ。」

「あたね、おじさまみたいなお年よりきらいになっちゃった、  
幾らいつてもテンポが鈍のろくて、じれじれして噛みつきたいくらい  
だわ。」

「金魚に噛みつかれたって痛くないよ、いくらでも噛みつくがい  
いよ。」

「あんなことを言っている、あたねだって一生懸命に噛みついた  
ら、おじさまの痩せた頬のになんか、咬かみとるわよ。」

「怖いね、大きな眼をして。」

「おじさまと遊んでやらなかつたら困るでしょう。呼んだって返事しないからね。」

「慍るな、あやまる、きみが遊んでくれなかつたら、誰と遊んだらいいんだ。」

「じゃ、先刻のことをもう一遍くり返しているのよ、ね、いいこと、人を好くということは、……」

「人を好くということは嬉しいものです。」

「おじさま、早く起きて。」

「すぐ起きるよ、石が着いたらしいね。」



「どんどん着いているわよ、表に出て見て驚いちやった。道ばたは通れないくらい積み上げて行つたわ。」

「まだまだ運んでくるよ、そうだな、今日一杯運搬はかかるね。」  
「あんなに石をお買いになつて、何をなさるおつもりなの。」

「あれで石の塀をつくるんだよ、石の塀は燃えないからね。」

「此間の火事でお懲りになつたのね、あんどき、あたいくらいある大きい火の粉がどんどん降つて来たわね、あたい、水の底から見ていると、しゅつと水に落ちた火の粉で、あたいのいるところの水まで熱くなっちゃった。おじさまが来なかつたら水が熱く沸いて了つて、死んでいたかも知れないわ。」

「平つたくなつて水底でふるえていたね、眼だけ大きく開けて、」

「でも呼んだら来てくださって、たすかったわ、あたい、あれからずっと眼が焼けたようにへんになっているのよ。」

「まるで二疋ずつ重なってふくれて見えた程だ、金魚に火事と来たら、それ以上の赤い色ないね、だからあの晩からおじさんは考え続けたのさ。」

「石の塀をおつくりになることでしよう。」

「今までの竹の胡麻穂だと燐寸一本で、火が一面にひろがるからね、まるで家の周囲に燃えやすい焚たきつけ附を置いていたようなものなんだ。」

「火事があったら小母さまの足が立たないから、なかなか逃げ出せないし、あたいは小ちやいからお手伝いができないもん、その

前にあたいななんかあぶられて死んじまっているかも知れないわ、おじさまはどうして小母さまを背負い出すおつもりなの。」

「そこで塀は石につくりかえることに考えついたんだ。おじさんが死んだ後に垣根を結び返す必要もないしね、胡麻穂の垣根ってお金がかかるんだ、息子や娘がいてもみんなお金がとれないから、垣根をやり代えることも、一年遅れになり五年八年と遅れてボロ家にボロの垣根になってしまう、きみはおじさんの大事な友達だけれど、それはただの金魚というぴかぴかのおさかなに過ぎないしね。」

「何の役にも立たないわね、ただ、おじさまの精神的なパトロンみたいにはなっているけど、一緒に寝ることもできないわね。」

「生意気なことは、誰よりも生意気だし、……」

「おじさま、早く起きてよ。」

「いますぐ。」

「おじさま、あれ何て石なの、まぶしいくらい白っぽくて、かさかさして眼に痛いのに。」

「あれは大谷石という石なの、あれで家のまわりをぐるつと包んで、火事があつても今までのように燃える心配がないだろう。七段くらい積み上げればね。」

「まるでお城みたいになるわね、気がついてよかつたわ。」

「どうに気がついていたらけれど、おじさんには、そんなお金がいままでになかつたのだよ。」

「じゃ、いまあるの。」

「このごろのおじさんはね、やっと石堀くらい作れるようになった。人間は一生かかっているながら、垣根も結えない時が続いた訳だね。」

「おじさまは何でも一生かかってなさる事はしているわね、お庭、やきもの、お仕事、みんな晩成おくてなのね。」

「なまいき言うな。」

「おじさま、いろいろお物入りばかりつづくけれど、あたい、おねがいの一つございますけれど、とうから考えていたんだけれど、こんどはついでに作っていただきたいんです。」

「どういう頼みか、いつてごらん。」

「あたいのお家もついでにつくってほしいの、あの石でまわりを  
囲うて広びろとしたお池みたいにしていただいて、真中にりゆう  
とした噴水をしかけて、噴き水がしたしたといちにち、山あいの  
滝のようにしぶくお家がほしいんです、その中であたい、おじさ  
まに扇の孔雀のように泳いでお見せすることも出来るし、おじさ  
まの好きな大口を開けてうたうことも出来るわ。」

「だんだんぜいたくになってくるね、作って上げるよ、そのつも  
りで黒い石もたくさん買って置いたんだ。」

「あ、嬉しい、あたい、白い石ばかりかと思って内々不服だった  
けれど、黒い石もお買いになつていたの、とても嬉しいわ、だか  
らおじさまは気が利いていて好きだというのよ、尾のところにお

触<sup>さわ</sup>りになつてもいいわ、くすぐつたくないよう、そよそよとお触りになるのよ。おじさま、尾にのめのめのものがあるでしょう、あれをお舐<sup>な</sup>めになると、あんまりあまくはないけど、とてもおいしいわよ、しごいてお取りになつてもいいわよ。」

「そんなことしたら、きみは泳げなくなるじゃないか。」

「すぐ作れるもの、いくらでも次からのめのめのあぶらが湧いて出てくるわ。あたい、あののめのめの沢山湧いている日が一等うれしい日なのよ、こう言っているまにぐんぐん湧いてくるわ。」

「尾の附根が光り出したね、ちよいと失礼だけれど、お尋ねしますがね、慍<sup>おこ</sup>り出したらいけないよ。」

「なあに、」

「一たい金魚のお臀しりつて何処にあるのかね。」

「あるわよ、附根からちよつと上の方なのよ。」

「ちつとも美しくないじゃないか、すぼつとしていただけだね。」

「金魚はお腹が派手だから、お臀のかわりになるのよ。」

「そうかい、人間では一等お臀というものが美しいんだよ、お臀に夕栄えがあたつてそれがだんだんに消えてゆく景色なんて、とても世界じゆうをさがして見ても、そんな温和しい不滅の景色はないな、人はそのために人も殺すし自殺もするんだが、全くお臀のうえには、いつだって生き物は一疋もいないし、草一本だって生えていない穏かさだからね、僕の友達がね、あのお臀の上で首を縊くりたいというやつがいたが、全く死場所ではああいいうつるつ



るてんの、ゴクラクみたいな処はないね。」

「おじさま、大きな声でそんなこと仰有ってははずかしくなるじゃないの、おじさまなぞは、お臀のことなぞ一生見ていても、見えない振りしていらつしやるものよ、たとえ人がお臀のことを仰有っても、横向いて知らん顔をしていてこそ紳士なのよ。」

「そうはゆかんよ、夕栄えは死ぬまでかがやかしいからね、それがお臀にあたつていたら、言語に絶する美しさだからね。」

「おばかさん、そんなこと平気で仰有るなら、あたい、もう遊んであげないわよ。人間も金魚もいつもきちんとしたことばを口にすべきだわ。お臀って自分で見られないように、後ろ側について、人間の中でも一生自分のお臀を見ないで死ぬ人さえあるの

に、おじさまったらその秘密がわからないの、どんな映画だつてお臀だけは写さないわよ。」

「このあいだ『殿方ごめんあそばせ』って映画で、ブリジット・バルドーがお臀を見せるところがあつたよ。可愛いお臀だつた、もつとも、はなはだ瞬間的のものではあつたがね。」

「おじさま、いやなところばかり見ていらつしやるのね、あたい、おじさまと遊ぶのがまたいやになつちやつた。」

「人間でも金魚でも果物でも、円いというところが凡て一等美しいんだよ、十くらいの女の子がおしっこをしているのを外で見かけると、吃驚<sup>びっくり</sup>していくからおじさまでも顔を反けたくなるね、自分というものを知らないでしていることが、それを全部知ってい

る側から見ると、純潔以前の野蛮な感情で自分自身でどやしつけられるんだ。それが余りに不意に見なければならぬ状態に置かれた自分を責めたい気分だね、こまるね、そんな時はね。」

「あたいね、おじさまがコドモのおしっこしているのを見てさえ、自分のどこかに響かして考えようとするのは、不倖だとおもうわ、誰もそこまで考えをつきこんでいる人いないわよ。」

「そうかな、厭らしい事くらい反省を促してくるものがない筈だが、人間の子供のすることなぞ、一遍におじさまを遣附やっつけてくるんだ。いわば不倖かも知れないね、この不倖を不倖に感じない人間に、たまたま破廉恥な犯罪がうまれてくるんだね、今までにそのために何十人かの少女が殺されたかわからないね。おじさまだ

って自分を怖い処に立たせて見て、どれだけの分量で自分に厭らしさがあるかを調べているんだが、何時も恐ろしい結果がヘビのように首をあげてくるね、裁判官という人達はどれだけ他人をしらべていながら、犯罪者から教えられ又救われているか判らないね。だから人間は自分にあたえられたお臀ばかりを見つめくらしでいさえすれば、他に苦情がおこらないんだ。たいがいの人間はそうしているんだよ。」

「おじさまは？ おじさまだってまだお臀が見たいんでしょう。」  
「そりや見たいさ。併し問題が夕栄えの景色から外したお臀のこ  
とになると、だんだん声が低くなるし大ぴらには言えなくなるね、  
おじさんの僅かばかり受けた教育がそうさせてくるんだね、人間

に書物とか教養があたえられたことは、僕一人にとつても大へんな感謝に値するわけだね。」

「おじさまはそんなに永い間生きていらつして、何一等怖かつたの、一生持てあましたことは何なの。」

「僕自身の性慾のことだね、こいつのためには実に困り抜いた、こいつの付き纏まとうたところでは、月も山の景色もなかつたね、人間の美しさばかりが眼にはいつて来て、それと自分とがつねに無関係だったことに、いよいよ美しいものと離れることが出来なかつたね、やれるだけはやって見たがだめだった、何も貰えなかつた、貰つたものは美しいものと無関係であつたということだった、それがおじさんにたあいのない小説類を書かせたのだ、小説の中

でおじさんはたくさんの愛人を持ち、たくさんの人を不倖にもして見た。」

「おじさま、いい考えがうかんだのよ、おじさんとあたいのことをね、こい人同士にして見たらどうかしら、可笑しいかしら、誰も見ていないし誰も考えもしないことだもの。」

「そういう場合もあるだろうね、乞食のように生きてゆくひとは、犬や猫と生涯をおくることもあるからな、犬や猫は寝ていると女くさくさくなってゆくけれど、金魚とは寝ることが出来ないしキスも出来はしない、ただ、きみの言葉を僕がつくることによつてきみを人間なみに扱えるだけだが、まあそれでもいいね、きみと恋仲になつてもいいや、僕には美しすぎた過ぎ者かも知れないけれど、

瞳は大きいしお腹だけはデブちゃんだけね。」

「あたいね、おじさまのお腹のうえをちよろちよろ泳いでいってあげるし、あんよのふとももの上にも乗ってあげてもいいわ、お背中からのぼって髪の中にもぐりこんで、顔にも泳いでいって、おくちのところにはばらくとまっついてもいいのよ、そしたらおじさま、キスが出来るじゃないの、あたい、大きい眼を一杯にひらいて唇をうんとひらくわ、あたいの唇は大きいし、のめのめがあるし、ちからもあるわよ。」

「しまいに過ってきみを呑みこんで了ったらどうなる、それが一大事件だ。」

「そしたらお腹の中をひとまわりして、また上唇のうえにもどつ

て出てくるわよ、金魚ですもの、ねばり気のあるところでは、あたいのからだはどんなに小さくも伸び縮みすることが出来るし、早く泳ぐこともできるのよ。どう、お腹のうえを泳いであげたら、おじさまはくすぐ撥くすぐったくなり嬉しくなるでしょう。」

「そうね面白いだろうね、けど、撥くすぐったくてかなわないだろう、ぴちぴち跳ねられたら？」

「そつとして上げるわ、慎重に。」

「なにぶん、よろしく頼むよ。」

「では恋人になるわね。」

「何て呼んだらいいんだ、名前からつけなきや。」

「赤い井のなかの赤子、赤井赤子ってのはどう。」



「いいね、あか子、赤井赤子というのはちよつと変っていて、呼びいいね。ではそう呼ぶことにしよう。」

「それからね、いろいろ物を買っていただけがなくちや、あたい、何一つ持っていないんですもの、頸飾ネックレスだの、時計だの、時計はきん色をしたびかびかしたのね、それから指環もいるけど靴だの洋服だの、……」

「きみがそんな物を着たり嵌はめたりしたら、お化けみたいじゃないか。」

「お化けでも何でもいいわよ、買っていただけなの。」

「買うよ、おじさんの買物を控えめにすれば、何でも買える。」

「も一つ肝腎なことは毎月小遣どれくらい貰えるの、それを決め

てかからなきや、それが一等肝腎なことだと思わ。」

「そうだな、千円もあればいいんじゃないか。」

「千円ぼっちで何か買えるとお思いになるの、どんなにすくなくとも五万円いたただかなくちや暮せないわよ。」

「五万円という金はおじさんの小説一つ書いたお金の高だよ、それだけ毎月きみに上げたからおじさんこそ、どう暮しているか判らない、まあせいぜい一万円くらいだよ、それで尠なかつたら恋人はやめだ。」

「こまるわ、一万円じゃ。じゃね、クリイムだのクチベニのお金は時々べつの雑費として出していただけますか？」

「それは随時に出すことにするよ、現金では一万円以上はとて

出せないよ、金魚のくせに金取ってどうするつもりなの。」

「じゃ一万円でいいわ、ふふ、一万円の恋人ね、あたいはたらくことにするわ、縁日の金魚盃だらひに出てゆくわ。」

「そしてどうする。」

「買って行った人の家から、晩方にはおじさまの家に直ぐ逃げてもどるわ、あたいは一足で三百円が懸値かけねのないおねだんだから、逃げ出してはまた別の金魚屋に売られて、またおじさまの処に戻って来るわ。」

「見附けちかつたらどうする、殺されるぜ。」

「人間けちって吝けちだから三百円もする金魚は決して殺しはしないわよ、それに、皆さんは金魚だけはどんな残酷屋さんでも、殺すもんで

すか、金魚は生涯可愛がられることしか、皆さんから貰ってないもの、金魚を見て怒る人もまた憎む人もいないわ、金魚は愛されているだけなのよ、おじさまも、それだけは頭に入れて置いてほしいをいじめたり、怒らせたりしちやだめよ。」

「判った、きみはえらい金魚だ、娼婦であるが心理学者でもある金魚だ。」

「昔、支那の皇帝がお池で金魚の衣裳を着けた女達を泳がせたことがあるの、それ以来金魚は擬人法をならうことが出来たし、水の中でうんこをすることも覚えたの。」

「じゃ何かい、そのお池で誰かがうんこをもらした女がいたの。」  
「そうらしいわ、金魚唐史に出ているわ、支那から泳いで来たど

いうのはでたらめだわね。きつと商人達がもうけるためにお船で持って来たのよ、おじさま、もう、そろそろ寝ましようよ、今夜はあたいの初夜だから大事にして頂戴。」

「大事にしてあげるよ、おじさんも人間の女たちがもう相手にしてくれないので、とうとう金魚と寝ることになったが、おもえばハカナイ世の中に変ったものだ、トシヲトルということは謙遜なことおびただ黽しいね、ここへおいで、髪をといてあげよう。」

「これは美しい毛布ね。」

「タータン・チエツクでイギリスの兵隊さんのスカートなんだよ、きみに持って来いの模様だね。」

「これ頂戴、」

「何にするの、厚ぼったくて着られはしないじゃないか。」

「大丈夫、スカートにいたします、まあ、なぜお笑いになるの。」

「だってきみがスカートをはいたら、どうなる、」

「見ていらつしやい、ちゃんと作ってお見せするから。どう、あたいたい、つめたいからだをしているでしょう。ほら、ここがお腹なのよ。」

「お、冷たい。」

「むかしね、おじさま、」

「また秦の始皇が大きな鯉と寝て風邪をひいたという話でしょう、それなら何遍も聴いたよ、それでなきや唐の姫達が一足ずつ金魚を口にふくんで、皇帝の穩座おんざを飾ったという話だろう、うまいこ

とを考えついたものだね。金魚を啜くわえて伺候するなんてね。」

「むかしむかしね、おじさま。」

「ふむ。」

「あたい達の眼があんまり動かないので、瞬きをして表情を多様にするための眼のお医者様がいたのよ、いまの眼を大きくする病院みたいなところなのよ、その眼医者<sup>はや</sup>がたいへん流行つちやつて、みんな、眼の治療に行ったけれど、後でよく気がつくと、眼ん玉が引っくり返っただけで依然として、金魚の眼はまたたくことが出来ないで、じつとしてるじやないの。」

「金魚の眼はいやに動かない眼だな。」

「だから紅鱗こうりん瞳ひとみと競きそい、瞳孔どうこう人ひとこれを見ずという悲しい詩が

あるくらいだわ、おじさま、そんなに尾っぽをいじくつちやだめ、  
いたいわよ、尾っぽはね、根元のほうから先の方に向けて、そつ  
と撫でおろすようにしないと、弱い扇だからすぐ裂けるわよ、そ  
う、そんなふうに水のさわるように撫でるの、なんともいえない  
触りぐあいでしょう、世界じゅうにこんなゆめみたいなものない  
でしょう。」

「先ず絶無とっていいね、人間なら舌というところだ。」

「あとでお腹の掃除もしてあげるわ。」

「何処に行くの、じつとしていたまえ、」

「背中のようなすを見てから、胸のうえに登つてと、まるでお山が  
続いているみたいね。人間一人をつかまえてしらべて見ると、と



ても、大きいくじらみたいなものだわね。」

「寝たまえ、おしゃべりはいい加減にして寝たまえ。」

「ええ。おじさまは明日は何をなさるおつもり。」

「明日はね、石の塀をつくるんだ、職人衆の来る前に起きて、指図をしたり形をきめなければならぬんで忙しいんだよ。」

「あたい、どうしていたらいいの。」

「あたいは一人で遊んでいたらいいんだ。目高を呑みこんだり吐き出したりしていればいいよ。」

「おじさまは遊んでくれないの、つまんないな。」

「きみと遊んでばかりいられないよ、そのほかに仕事もあるんだ

。」

「また小説でしょう、あたいのことなぞ書いちやいやよ、書く人と書かれる人のちがいは、大変なちがいだから書かないでよ、」

「ところがね、おじさんは此間から金魚はなぜあんなみじかい生涯を生きなければならぬかと、そんな事をしじゆう、考え続けているんだ、たとえば目高は人間にしたしまないが、金魚はあしおとがすると、すぐ集まってくる、そこに目高と金魚の遠近が人類とむすびついて来る。」

「つまらない事を仰有るわね、それより、此方を向いて頂戴、こ  
とわざいに曰く作家老いて悲境に陥るといふことがあるが、おじさ  
まもその部類ね、かくごはしていた、なんて仰有るけど、こうみ  
るとすでにふつうの人の百歳の年齢に足をふみいれているわね、

足はがさがさして鹿の足のごとく、お背中はやつと張っているだけね、遠い遠い百歳がもうやって来ているわね、七十歳でもう百歳の人、あるだけを書き、あるだけを叩き売った心のぼろを提げている踵のヤブれた人、そんなひとがさ、あたいのような若いのと一緒に寝るのは、百歳にして恋を得たと矜ほこりがましく仰有つても、いいくらいよ、あたいはもう金魚じゃないわね、一枚の渋紙同様ののおじさまだつて生きていらつしやるんだもの、一たい何処にいのちがあるのよ、いのちの在るところを教えていただきたいわ。」

「おじさんはおじさんを考えてみても、いのちを知るのに理窟を感かえじてだめだが、金魚を見ていると却かえつていのちの状態が判る。ひねり潰せばわけもない命のあわれさを覚えるが、おじさん自身

のいのちをさぐる時には、大論文を書かなければならない面倒さがある。」

「論文なんていやね。そしてあたいが麩をたべているときに、いのちを感じると仰有りたいでしょ。あたいの生きていることは、おじさまを困らせている時ばかりだ。」

「スーツを買え靴を買えという時か。」

「そのほかにもある。追々わかってくるわ。しまいにおじさまはあたいを煩さがって、何処かに捨てに行きやしないかと思うことがあるわ。でなきや殺してしまうかの二つだわ。」

「きみが木々の間を泳ぎまわりおじさんに蹤ついているあいだ、おじさんはきみを大事にしているんだ、きみは何処にでも匿すこと

が出来るし邪魔にはならない。」

「おじさま、何時あたいが木の間に泳いでいるのをごらんになったの、」

「明るい日の中の梢に何だろうと見ていると、きみの泳いでいるすがたが見えていた。池を見るときみはいなかったのだ。きみは恐ろしい金魚だ、木の間をつたい、木の下におりて行つたが、いまでも本当の事だとはおもえないくらいだ。」

「あたいだってあれは本当のことに思えないわ。おじさま、仰向いて寝てよ、あたい、お腹のうえだと、とてもお話しよいのよ。」

「おじさんの方からは、顔がよく見えないじゃないか。」

「これでいい？」

「あ、それでいい、だいぶ、からだが温まって来たね、お腹がふにやふにやしてきたじやないか。」

「お腹が空いてきたのよ、お水と餌とを持って来て頂戴、なんか大きな鉢のようなものに水を一杯入れてきてね、時どき、ざんぶりとはいらなないと呼吸ぐるしいわ、ついでに揚タオルもね、早くね。」

「はい、はい。」

「おじさまはしんせつね、美味しいお水ね、冷蔵庫から取り出して来たのでしよう、おう冷たい、あ、色が変わるくらい冷たいわね。」

「はい、ひだら干鱈。」

「ごまかく刻んでくださったわ、塩しよつばくていい気持、おじさま、して。」

「キスかい。」

「あたいの冷たいけれど、のめつとしていいでしょう、何の匂いがするか知っていらっしやる。空と水の匂いよ、おじさま、もう一遍して。」

「君の口も人間の口も、その大きさからは大したちがいはないね、こりこりしていて妙なキスだね。」

「だからおじさまも口を小さくすぼめてするのよ、そう、じつとしててね、それでいいわ、ではお寝みなさいまし。」

## 二、おばさま達

「石の上に子供達が集まって遊んでいるわよ、あれ、崩れたら、下敷きになっちまうわ。」

「そりや困るね、そんなに高く積み上げて行つたのか。」

「上へ上へと積み上げたもんだから、一等上の方から、地面を見ていると、眩暈めまいがして来るくらい高いわ。」

「きみ行つて、子供を下ろしてしまえ。」

「ええ、そう言つてくるわ。あの、皆さん、その石の上で遊んじやだめ、危いわよ、崩れて下になつたら、死んじまう、お利口さんだから別の処に行つて遊んで頂戴、ほら、ね、きゆうには降り



られないでしょう、さあ、あたいが抱っこして上げるから、彼方に行つて。」

「皆、行つたか。」

「行つたわ、あたいの顔を不思議そうに見ていて、あの人誰だい、あんな人、あの家で見たことがないじゃないか、と言つていたわ。」

「きみは派手な顔をしているからな。」

「おじさま、また来たわよ、怖いお隣の地主さんが来たわ、きつと、離れがお隣の地所に屋根をつん出しているのを、今度は何とかしなきゃね。」

「離れを一尺くらい、がりがり削り取るんだね。」

「こんどは石の塀だから、ふつうの場合とちがうわよ、どうなさる。」

「大工を呼んで境界ぎりぎりに削り取るんだ。でないと裁判沙汰になるし、法律では幅一尺の十五間けんぶん分の、つまりその三十年間の地代も払わなければならなくなる、やはり離れをこわ毀すことになるんだ。」

「可哀そうなおじさまね、でも、やむをえないわね。」

「やむをえないね。併し片側の出来栄は、なかなかいいじゃないか。やつと今度こそ生涯の垣根が出来た訳だ。」

「おじさま、此処へいらつしやい、石塀の上に腰かけていると、ずっと町の彼方まで見えて来て、いい気持だわよ。」

「高きに登るといふことは、いいね。石塀を作つて置いて宜かつた。」

「あたいね、おじさまがおはなれをお毀しになるか、そのまま突つぱねるかどうかと、じつと見ていたわ。」

「この前、そうだな五年くらい前だ、お隣のおじさんが来てね、あなたも名誉のある方だから、いますぐとは申しませんが、塀を作りかえるような事があつたら、地所は還してくださいと、そう言われていたんだ、地所といったつて、僅か一尺に足りない軒先だけがお隣に飛び出していたんだがね、そこでお隣では、後日のために一枚の書附をくれといつてね、おじさんは書附を書いて渡して置いたんだよ。」

「どう、お書きになった。」

「必要の時期にははなれを取毀しても、地所の出っ張りを引っこめますと書いたね。」

「その時期が来て了ったのね、今度は石の塀だから永い間壊れないから、軒先を引っこめたのね、だから、おはなれのお床の間がまがつつちやった。」

「だから素直にこわして雨落ちも、お隣に落ちないようにしたんだ。」

「地所というものは、憂鬱な境をもっているものね。」

「人間はむかしから国と国の間でも、そのために戦争もして来ただし、個人の間でも、がみがみ咬み合ったもんだよ、だから、

おじさんは地所というものは、一坪も持っていない、此の家も借地だし軽井沢の地所も借りている。」

「軽井沢に一度連れて行ってよ、汽車の中でも、温和しくしていただきますから連れてって。」

「土瓶に水をいれて、きみをつれて行くか。」

「駅々で水をかえてくださらなきやだめ。水が列車でゆれどおしだから、あたい、ふらふらになつちやつて、とても草臥くたびれてしまふのよ。」

「山の水はきみにはどうか。」

「山の水にひたると、あたいのからだは燃え上つて来るし、瞳は一そうキラキラになるわ。あたい、おじさまと毎日山登りをする

わ。ね、考えても愉しいじゃないの。魚は木を越え山に登ると、誰かもいったじゃない？ あたい、せいぜい美しい眼をして見せ、おじさまをとろりとさせてあげるわ。」

「きみは人間に化けられないか。」

「毎日化けているじゃないの、これより化けようがないじゃないの。」

「もつと美しい女になって、見せてほしいんだ。」

「おじさまはどうして、そんなに年じゆう女おんなって、女がお好きなの。」

「女のきらいな男なんてものは、世界に一人もいはしないよ、女がきらいだという男に会ったことがない。」

「だっておじさまのような、お年になっても、まだ、そんなに女が好きだなんていうのは、少し異常じゃないかしら。」

「人間は七十になっても、生きているあいだ、性欲も、感覚も豊富にあるもんなんだよ、それを正直に言い現わすか、匿しているかの違いがあるだけだ、もつとも、性器というものはつかわないと、しまいには、つかい物にならない悲劇に出会すけれど、だから生きたかったら、つかわなければならぬんだ、何よりそれが恐ろしいんだ、おじさんもね、七十くらいのジジイを少年の時分に見ていて、あんな奴、もう半分くたばってやがると、蹶けと飛ばしてやりたいような気になって見ていたがね、それがさ、七十になつてみると人間のみずみずしさに至つては、まるで驚いて自分を

見直すくらいになつてゐるんだ。」

「性器なんていやなこと、平氣でおつしやるわね。そんなことは、口になさらない方が立派なのよ。」

「心臓も性器もおなじくらい大事なんだ。なにも羞かしいことな  
んかないさ、そりや、おじさんだつて性器というものには、こい  
つが失くなつてしまえば、どんなに爽やかになるかも知れないと、  
ひそかに考えたこともあつたけれどね、やはりあつた方がいいし、  
あることは、どこかで何事かが行える望みがあるというもんだ。」

「そんなこと大声でおつしやつては、あたいが赧あかくなつて了うじ  
やないの。人間のたしなみの中でも、一等謹んでそつとして置く  
べきことなのよ、口にすべきことじゃないわ。」



「そりやそつとして置きたいんだよ、けれども一遍くらいは七十の人間だつて百歳の人間だつて、生きて脈打っていることを知っていたんだよ。」

「じゃ、おじさまはわかい人と、まだ寝てみたいの、そういう機会があつたら何でもなさいます？」

「するさ。」

「あきれた。」

「だからきみとつきあっているじゃないか。おじさんが牧師や教員のまねをしていたら、生きることには損をする。そりや綺麗に生きるためにも、したいことはするんだ。きみはいま、おじさんのふとももの上に乗っているでしょう、そして時々そつと横になつ

て光ったお腹を見せびらかしているだろう、それでいて自分で羞かしいと思つたことがないの。」

「ちつとも羞かしいことなんか、ないわよ、あたい、おじさまが親切にしてくださるから、甘えられるだけ甘えてみたいのよ、元日の朝の牛乳のように、甘いのをあじわっていたいの。」

「それ見たまえ、ちんぴらのきみだって、自分のつくつたところに、とろけようとしているんじゃないか。何も解りもしないきみが、こすり附けたり噛みついたりしていても、それで些ちつとも羞かしい気がしないのは、きみが楽らくなことをらくに愉たのしんでいるからなんだ。」

「あら、そうなるか知ら。だったら、羞かしくなるわね。」

「亢奮してからだじゆうぴかぴかじやないか。これでおじさんの先刻から言ったこと解つただろう。」

「解つたわ。ごめんね、なんだかあたい、ふだん考えていること匿していたのね。」

「実際に行うていながらね。」

「つじつまが合わなかつたわね。」

「つまり年をとると、本物だけになって生きかえつているところがあるんだよ。」

「だから若いひとがいいの。」

「こちらが少年になっているから、結局、若いのがよくなる。」

「けどね、おじいちゃんが若い人を好くというのは、ちよつと、

いやあね。見苦しいわ。」

「ちつとも醜悪じゃない、当り前のことなんだ。」

「だから、あたいのような若いんじゃないやなくては、だめだというの。  
」

「きみより若いひとはいないね、たった三歳だからね。三歳のきみが七十歳のおじさんと、腕をくんで山登りするなんて、世界に二つとない珍風景だね。きみはきまりの悪い思いをしないか。」

「あたいは本当は、おさかなでしよう。だからちつとも羞かしくないわ。おじさまは他の方<sup>かた</sup>におあいになつたら、きつとお困りでしょうに。」

「なるべく隠れて歩きたいな、<sup>みつ</sup>発見けられたって構いはしないけ

ど、おじさんの生きる月日があとに詰ってたくさんないんだもの、だから世間なんて構っていられないんだ。嗤わらおうとする奴に嗤わらって貰い、許してくれる者には許してもらうだけなんだよ。きみはきらいかも知れないけど、その点で実に凶々しく大手を振って歩けるんだよ、世間で手を叩いて莫迦ばか扱いにしたって平気なもんだ。生きるのに何を皆さんに遠慮する必要があるもんか。」

「おじさまはとても凶太いことばかり、はつとすることをぬけぬけと仰有る。そうかと思うと、あたいのお尻を拭いてくださるし……」

「だってきみのうんこは半分出て、半分お尻に食つ附いていて、何時も苦しそうで見ていられないから、拭いてやるんだよ、どう、

らくになつただろう。」

「ええ、ありがとう、あたいね、何時でも、ひけつする癖があるのよ。」

「美人というものは、大概、ひけつするものらしいんだよ、固くてね。」

「あら、じゃ、美人でなかったら、ひけつしないこと。」

「しないね、美人はうんこまで美人だからね。」

「では、どんな、うんこするの。」

「固いかんかんのそれは球みたいで、決してくずれてなんかいない奴だ。」

「くずれていては美しくないわね、何だかわかって来たわよ。」

「きめの織こまかいひとはね、胃ぶくろでも内臓の中でも、何でも彼でも、きめが同じようにこまかいんだよ、うんこも従つてそうなるんだ。」

「おじさま、うかがいますが、あたい美人なの、どうなの教えて。」

「きみは美人だとも、きみのまわりに何時も十人くらいの子供が、うやうやしてきみを飽きることも知らないで眺めている。」

「どの子もお金を持っていないで、眺めているだけね。可哀想ね、子供はお金を持つてはいけないの。」

「子供はほかの事にお金をみんな使つてしまつて、最後に金魚屋の前を通つて、失敗しまつた、あんなにお金はつかうんじゃないか。」

と、悲しげに金魚を眺めているだけなんだよ。何時も何時もそうなんだよ。」

「わかったわ、で、みんな悲観して茫然と立っているだけなのね。金魚は買えないし、見れば見るほど美しい、だから、先刻から一時間も立って眺めている、……おじさま、金魚を一尾ずつでもいから、子供達に買ってあげてよ。」

「うむ、ほら、お金だ、きみが買ってみんなに頒けてやるがいい。」

「ありがとう。子供の顔ったら悲しそうで見ていられないわ。あら、あの金魚屋さんは、凝乎じっと先刻からふしぎそうにあたいの顔を見ている、……」



「どこかに見おぼえがあるらしいんだな。」

「あたかも彼の顔あだけはわすれることが出来ないわ。毎日彼の顔あばかり見ている、そだつて来たんだもん、いまあたし、おじさまの頬っぺを引っぱたいても、慍いらないですよ。」

「どうしてそんな事をする。」

「あたしがえらくなつた証拠を、金魚屋さんの眼に見せてやるのよ、きつと驚くでしょう。」

「じゃ、引っぱたいてもいいよ。」

「ごめんよ、びっしりとゆくわよ、痛くないこと。」

「ちつとも、」

「金魚屋さんたら惘あきれちゃつて、此方をきよとんとした眼で見、

口を開けたまんま言葉も出ないふうね。」

「他の者には女に見え、金魚屋には金魚に見えるきみが不思議な  
んだらう。」

「その金魚がお金を持ってね、金魚を買いに行くということは嬉しいお話じゃないの、ほらね、子供達がみんな此方を向いて、金魚をすくい出し始めたじゃないの。坊や、大きいのを上げるわよ、おばちゃんがお金払うから、心配しないで、どんどん、すくい上げているのよ。」

「おばちゃん、十人もいるんだぜ。」

「何十人いたっていいわよ、おばちゃんは、きょうは、お金はうんと持っているんだ。」

「そんなら、証拠にお金を見せてよ、おばちゃん。」

「これだけみんな買ってあげるわ。あるだけ盥たらひの金魚をすくい出して持ってお帰りになるがいいわ。ほしけりや金魚屋のおじいちゃんも売つてもいいわよ、ふふ、……こんにはお久しく、おじいちゃん。」

「おう、三歳さいつ子、あれがおめえのだんなかい、うまくやったな、よぼよぼは直ぐかたがつくから、しこたま貰つとくがいいぜ。」

「何言つてんの、だんなじゃなくてセンセイだわ、締め殺したつて死ぬ方じゃないわよ、心臓には鉄屑が一杯つまっていらつしやるから、あんたなんその手に負えはしない。」

「それじゃ機関車じゃねえか。」

「旧式の機関車なもんだから、森林でも山でも、咬み倒して走ってゆくわよ。」

「おめえは一たい、あの方の何なんなんだ、わかった、おめかけさんだな。」

「あたい、あの方のこれなのよ、お妻さんなんかじゃないわ、も一遍、頬ほっぺ叩いて見せてあげるわ、ね、ちつとも、お愠りにならないでしょう、あたいの言うこと何だつて聞いてくれるのよ、いまにお池と魚洞うろをつくつてくださるお約束なの、おじいちやま、お金がほしかったら、こんど来る時にうんと金魚持っていらいっしやい、お池に放すんだから、どれだけ居たって足りることはないわ。」

「おめえは偉い金魚に、何時の間に早変りしたんだ。」

「相手次第でどんなにでも、かわれば変ることが出来るものよ、多少バカでもね。」

「いつでも鏡台にむかってベそ搔いていたからな、お客はつかないしからだは弱いしね。だが、三歳つ子、こんだ当てたな、あのじじイ、したたかな顔をしているが、商売は一体何だ。」

「知らない。」

「知らないことあるもんか、こそつとおらにだけ言えよ。」

「知らないつたら知らないわよ、知っていたって金魚屋さんなんか、あの人のこと言うもんですか。」

「言えない商売ならどろぼうか、かた騙りの類だろう、だが、どろぼ

うが石堀の中に住むことは、ねえからな。ひよつとすると凶面引きかな。なんとか言ってくれよ。」

「知らない、あたい、あの方のこと言わないってお約束がしてあんだから、いくら、おじいちやまだって言えないわ、誰にだっていうもんか。おうい、おじさま、そろそろお出掛けのお時間よ、早くお髭ひげを剃ってお湯にはいつて、ご用意なさらなければ、時間に遅れたら大変なことになるわよ。」

「憂鬱だな、講演というものはもう三日前から、食欲がなくなつて了うし、胸は酸すっぱくなるし、元気までなくなる、……」

「だってこの間からお書きになっていた原稿を程よく、時間をお置きになつてろうどくなさればいいのよ、さあ、お髭をお剃りに

なつて。」

「きみは来てはだめだよ。」

「だってあたいがいなかったら、おじさまはびくびくして講演出来なじやないの。あたい、うしろに隠れていて、おしりを抓つかっておあげするわ。」

「だからお節介せつかいはやめてくれと言うんだ。一人なら吃りながらも喋しゃべれるが、きみがいると気が散るんだ、頼む、きようは来ないでくれ。」

「なんて悲壮なお顔なさるわね、じゃ、行かないわよ。」

「慍るなよ、おじさんは一人だと、さばさばして何でもお喋りが出来るんだ。」





「くるまが来たわよ、あら、美しい婦人記者がお迎えなのよ。ぴちぴちして、くるまと同じ色の靴はいていらつしやる。」

「きようは美人も眼にはいらぬ。」

「なんて顔なさるの、ほら、お帽子よ。」

「じゃ、行つて来る、来ないでくれよ。」

「じゃ、行つてらつしやい。おじさま、顔、もう一遍見せて、それでいいわ、もう元氣が出て来て、かくごをしたお顔色になつてゐるわ。」

「あの、お見受けしたところ、どこか、おからだがお悪いんじやございませんか。」

「は、少し何だかきゆうに。」

「たいへんお呼吸が苦しそうですが、お水でも、おあがりになりましたら？」

「水なんかあなた、会場ここではとても。」

「お水ならあたい、いいえ、わたくし、持っていますから、水筒の口からじかにおあがりくださいまし、さあ、どうぞ。」

「まあ、これは、恐れいります。」

「どうぞ、ぐつと、……」

「は、」

「もつと召しあがって、あ、おらくになつて、お顔の色が出て来ましたわ。ほらね、呼吸づかいがちゃんと、平均して来たじやご

「ございませんか。」

「は、どきどきするのが停つてまいりました。何とも、お礼のもうしようもございません。」

「もう、ちよつと召しあがれ。」

「あ、おいしい。もう、おさすり下さらなくても、結構でございます。どうぞ、お手をおろしてくださいまし。」

「お呼吸の苦しい間、お背中が強張こわばつていましたけれど、あ、そう、わたくしもお水いただいで置きましょう。お廊下に出てお憩やすみになったら？ 上山さんの講演も終わりましたし。」

「では、ごめいわくついでに、ご一緒にしていただきます。」

「このクッションには、よりかかりがあつてございます。」

「もうすっかり楽になりました。わたくし心臓が悪いものですか、会場に参つてからも気をつけていたんですけれど、ふいに、前の方が暗くなつてしまいました。」

「あなたが俯向うつむいていらつしても、お呼吸のはあはあいうのが聴えて来るんですもの、驚いちゃつてどうしようかと、ひとりであうろたえてしまつたんです。」

「あの、へんなことお聴きするようですけれど、どうしてお水があんなに沢山お持ちに、なつていらつしたんでしょうか。」

「ええ、少し訳がございました、……」

「あら、ごめんあそばせ、失礼なこともうしあげまして、あなたがそんなにお若いのにご要心深いと、ついそう思ったものですか

ら。」

「わたくしは何時もお水がほしい性分なものですから、水筒をはなしたことが、まだ一度もございません。」

「お井戸の水でございますね。」

「よくござんじでいらつしやいますこと。それより今日は誰方のご講演をお聴きにいらつしつたんですか、まだ、ご講演がある筈なんです。」

「わたくし上山さんのご講演をお聴きして、もう帰ろうと支度しかかかっていて、つい、めまいがしたものですから。」

「上山さんをごぞんじでいらつしやいますか。」

「上山さんに書き物を見ていただいたことがあるんです。十五年

も前のことですが、滅多めつたにご講演なぞなさらない方なものですから、お目にかかりたくても機会がなかったのですが、新聞でお名前を見て今日は早くから参っていたのが、からだに障さわったのかも知れません。」

「まあ、おじさまと十五年も前に、お会いになっていらっしったんですか。」

「おじさまって仰有ると、それは上山さんのことですか、水筒に上山と書いてあったものですか、はっとしたのですが、上山さんのご親戚の方なんですか。」

「ええ、親戚の、そうね、孫のような者なんですけれど、お身のまわりの事も見ておあげしている者です、どう言ったら巧くわた

くしの立場がいい現わせるか、いいにくいんですけど。」

「でも、おじさまってお呼びになつていらつしやいますから、きつと、同じお家にいらつしやるんでしよう。」

「え、きようのご講演は聴きに來ちやいけないって、厳しく申しつけられていたんですけれど、家にいるのがたまんなくて参りましたの、あたいがいなくては、上山は何も出来ないんですもの。」

「まあ、あたいつてお可愛らしいことを仰有る。」

「もう、言つちやつたから言うけど、あたい、おじさまが失言したりなんかしないかと、びくびくして聴いていました。そしたら巧くお喋りになれてほつとしちやつたの。そしたらこんどは、あなたのおからだが悪くなつて、それが会場総立ちになつたらおじ

さまが可哀そうだから、お水をさし上げたのよ、あたい、あんなに慌てたことがないんですもの。」

「あなたはお幾つにおなりなの。」

「あたい、幾つかしら、幾つだと言ったら適當なのかわかんないけれど、十七くらいになるでしょうか。」

「それで上山さんはあなたをお可愛がりになつていらつしやるんですか、たとえば、おみやげとか、お買物とか、ご飯も、ごしよにあがつていらつしやいますか。」

「いいえ、ご飯は別ですけれど、あたいの食べる物は、ふつうの人とはちがいますもの。」

「どういふふうに、お違いになるんですか。」



「そんな事ちよつと簡単にはいえないわ、お食事はちがっていますけれど、夜もご一しよに寝ることもあるし、……」

「まあ、ご一緒にお寝みになるんですか、そんなことをあなたは平気でおっしゃいますけれど、ご一緒ということは、一つのお床で上山さんとお寝みになることなのよ、勘違いをしていらつしやるんじゃない、……」

「いいえ、一つのお床なのよ、あたい、おじさまのむねや、お背中の上に乗って遊ぶこともあるし、……」

「遊ぶんですって。」

「ええ、擦ったり飛んだり跳ねたりするわ、おじさまは眼をつぶっていらつしやいますただけだけど、あたい、そのお眼めめをむりに

開けたり、それからお眼め眼めの上にからだを据えていたりして、いますと、おじさまは、とても、眼が冷えてお喜びになります。」

「あら、そんな事までおつしやつて、あなたは大胆で無邪気でいままであなためたいな方に、わたくしお会いしたこと一度もないわ、も一度おききしたいんですけれど、余り失礼なことでもわたくし自身うかがうことも、羞かしいくらいなんですけれど。」

「どんなことか知ら、何でもお答え出来るわ、あたい、おばさまも好きになつちやつた、誰でも好きになつて困るんですけれど。」

「おばさまといつて下さると、嬉しくなるわ、あのね、お慥りにならないで聞いててね、あなたは上山さんと関係が**おあり**になるの、夜もご一しよだとおつしやるし、……」

「関係ってどんなことですか、あたいたい、関係ということ初めて聞いたわ。」

「おじさまはあなたとお寝みになってから、どんな事をなさいますの、こんなふうにものを言うの、ごめんなさいね、だって、こう言うより問い方がないんですもの、たとえばあなたをお抱きになつたりなさいます?」

「いいえ、仰向きにねていらつしやるだけなの、抱いていただいたことないわ、ただ、あたいたいの方でふざけるだけなの。」

「だってそんな事ある筈ないと思うんですけれど、まあ、あなたつて方、女でもないみたいに、ちつとも羞かしがらないで、何でもふつうの事のようにおっしゃるわね、強く抱いたら潰れてしま

うなんて、」

「潰れてしまうわ、あたい、ちいちゃいんですもの。」

「そんなに大きくなっていらつしやるじゃないの、おっぱいもお  
棚みたいだし、腕もまん円くてあぶらで冷たいし、血色もいいし、  
それでおじさまが何もなさらないんですか。」

「あたい、おじさまのこもりうたかも知れないわ、ふうと来て、  
ふうと吹かれて行くだけなんですもの。でも、おじさまはたと  
愉快的ことを知っていないながら、あたいに、してくださらない事  
なるわね、ずるいわ、あたい、おじさまに言ってやるわ、愉快的  
ことを抜きにしちや厭だつて。」

「そんな事おつしやつてはだめ、いままでどおりのおじさまで沢

山じゃないんですか。わたくし詰らない事をお話しましたけれど。」

「あたい、これ以上愉しいことある筈ないと、何時もそう思っていたんですもの。」

「わたくしね、先刻いただいたお水をあんなに沢山持っていらつしやる訳が、お聞きしたいんですけれど、どう考えて見ても判らないの。」

「あれは言えない、」

「なぜお笑いになります、だって水筒に一杯お水を持って講演会にいらつしやる訳は、とても判らないわ。誰にでも判りっこないわ。」

「そうね、おばさまにはとても、判りっこないわ、誰も判る人ないわ、誰にも知られたくないあたいのヒミツなんだもん、おばさまにもいうこと出来ないのよ、あたいのお口に手をかけて吐かそうとなすつても、頑として言わないわ、おじさまだけがその訳知っていらつしやいますけれど。」

「上山さんは何とおつしやっていらつしやるの。」

「何時もお水をわすれるなど仰有るわ、あたいの何も彼も、みんな知っていらつしやるんだもの。」

「おからだに必要いりようなんですか。」

「そうなの、水がなくなると、あたいの眼が見えなくなるかも知れないんですもの。それよりか、一たい、おばさまは何故十五年

もおじさまに、お逢いにならなかつたの、あたい、その訳が聞きたいんです。おばさま、その訳を詳しくお話して頂戴、おばさまの顔は美しいけれど余りに白っぽいし、お背中だつて先刻さすつたときに感じたんだけど、まるで、おさかなみたいに冷え切つていたわ。」

「わたくしあの時、ずっと血の引いてゆくぐあいが、すぐ判つていたぐらいですもの、冷えるの当り前のことだわ。」

「いいえ、その事をお聞きしているのじゃないわ。なぜ、おじさまにお逢いにならなかつたかという事なのよ、ね、それをお話して。」

「あなたにお水が必要でその訳が仰有れないように、わたくしが

お逢いできなかつたことも、いま直ぐにはお話出来ないわ、」

「それもヒミツなのね、」

「ええ、そうよ、ヒミツなのよ。」

「おばさまはあたいをお好き。」

「え、もう、今日会場にはいると、すぐあなたのおそばに坐るよ  
うに、頭がふいに報しらせたの。」

「頭が報らせた？」

「そうよ、あの小さいお方のところに往け、そしておあいしりと  
言われたわ。」

「誰方どなたに、誰方がそう言ったの。」

「頭がそう作りあげたのよ、その時、あなたも扉の方にチラと眼



を向けて、ちやんと知っていらつしたふうじやないの。」

「あたい、あの扉から誰かが来る筈だと、会場にはいると、すぐ、ずっと、思い続けていたわ、一ぺんも会ったことのない人だが、会えばすぐ打ち融けてお話の出来る方で、お話ししなければならぬということが沢山たまっている方だとそう思っていたの。だから、お席をとつてお坐りになれるようにしていたのよ。」

「あなたは嬉しそうににこにこしてたわね。」

「あたい、おじさまがバカを言わないかと、それが可笑しくて。」

あなたはどうしてご講演中うつむいてばかりいらつしたの。まるで聴いていらつしやらないふうだったわ。」

「お顔を見るのが羞かしかつたし、見られまいと懸命にうつむい

ていたの、そして遂に一度も見なかつたわ。」

「何故、顔をお見せにならなかつたんです。」

「あの方にはお逢い出来ない訳がありますのよ。」

「どうして。」

「どうしても。」

「あたい、おじさまにあなたにお目に懸つたつて、きよう帰つたらお話するわ、まあ、そんなにお顔の色を変えちやつて。お話するのが悪いんですか。」

「あなたに何も言つて下さるなど言つたつて、とても、だまつてはいらつしやらないわね、けれど、おじさまはわたくしにあなたが会つたと仰有つても、そんなばかな事があるものかと、信じて

くださらないわよ。」

「何故か知ら、だつてこうしてお会いしているのに？ おばさま、お手々<sup>て</sup>出して、こんなに確かりにぎっているのに、嘘なんかじゃないでしょう、おばさま、キスしましょう。」

「まあ、あなたつて何てコドモさんなんでしょう、でも、キスすること知っているわね。」

「おじさまと何時もしているんだもの、あたいの、つめたいでしょう。」

「ええ、とても。」

「あら、あら、おばさま、皆さんが出て来たわ、講演が終つちやつたのよ、あたいの、こうしてはいられないわよ、おばさま、一緒

におじさまの処に行きましよう。きつと吃驚びっくりなさるわよ、あら、そんなお顔をお変えになつて一体何処にいらつしやるの。」

「わたくし、これで失礼します。」

「ね、おじさまにお逢いになつてよ、あたい、うまく取りなしておあげするから、一緒にいらつしやい。」

「若しわたくしのこと仰有るようだったら、わすれないでいますと、そう仰有つてね、お仕合せのようにつてね。」

「おばさま、往つちやだめよ、だめよ、往つちや。」

「では、おわかれるわ、おりこうさん。」

「おばさま、お手手出して。」

「そうしていられないんですよ、では、あなた、おじさまを好く

見てあげてね。」

「よくして上げるわ、往つちやいけないというのに。」

「じゃね。」

「おばさま、おばさま。」

「……………」

「あ、往つちやった、せつかく、大事なお友達が出来たのに往つちやったい、おばさまのばか、戻って来て、おばさま、……」

「おじさま、あたいよ。驚いたでしょう、ちゃんと来ていたのよ。」

「吃驚するじゃないか、ちんぴら、どうして来たんだ。」

「ここ開けてよ、ずっと、ご講演を聴いていたのよ、飛んでもない事、おっしゃるかと思つて心配しちやつた。ここ、開けてよ。」

「お這入り、あんなに來ちやいけないって言つていたのに、困つた奴だ。」

「だつてお家にひとりでいるのが、胸がやきもきして、とても、たまんなかつたもん、ご講演よく聴えたわよ。」

「でも、よく、ひとりでくるまを見附けて乗つたね。」

「駆けずり廻つてやつと見附けたのよ、このくるま新聞社のでしよう。」

「送つてくれるんだ、家まで。」

「あたい、赤い旗の立っているくるまに乗るの初めてだわ、とて

も、勇ましいわね。」

「水を持ってきているね、水筒なんか提げて要心深くていい。」

「おじさま、お話したいことが沢山あるのよ、此方お向きになつて。」

「むずかしい顔をして何を言い出すんだね、くたびれているから、少時、何も言わないでくれ。」

「大変な事があつたのよ、くたびれたでは済まないわよ、きょうね、あたいの横に坐っている方がいてね、顔色があお白しろいんだか白いんだか判らないくらい、乳のような色をしている方がいらつしたの、うつ向いて講演を聴いていらつしやるのよ、おじさまに顔を見られはしないかと、そればかり気にしているような方な

のよ。」

「演壇からは人の顔なんか、暗くて見えはしないよ。」

「そのうちその方がきゆうひどに酷ひどそうに、呼吸困難みたいになつちやつて、あたい、吃びっくり驚びっくりして水をあげたのよ、そしたら落ち着いて、ふうと呼吸もふだんのままになつて来たのよ。」

「よく気がついたな、心臓が悪い人らしいね。」

「よくわかりね、おじさまは。」

「何だ、人の顔をじつと見詰めたりなんかして、へんな子だ。」

「その方をお廊下の方におさそいして、憩やすませておあげしたの、もう、おじさまのお話が済んだ後だったから、クツションの上で永い間お話したわ、水のようにお廊下に人気がなくて、その方の



顔の色があたいの五体にしみ亘るほど、へんに冷たかった、おじさま、その方は一体誰だと思いいになる、……」

「さあ、誰だかね。」

「おじさま、言つて上げましょうか。」

「妙な顔をするじゃないか、知っている人なら早く言いたまえ。」

「吃驚しないでよ、田村ゆり子という方なのよ、とても鼻すじのきれいな方、あら、おじさまの眼の中がきゆうに動くのが停つちやつた。」

「田村ゆり子」

「そうなのよ、田村ゆり子っていう方なのよ、どう、吃驚したでしよう。」

「自分から田村ゆり子と名を言ったの、」

「あたいがお訊きしたからよ、そしたら水筒の水をおあげしたときに、上山つて書いてあつたのをお読みになつたらしいわ、きゆうに眼をあたいにじつとそそいで、こう、おっしゃつたわ。あなたは上山さんの誰方だとおいいになつたから、あたい、おじさんの事何でも見てあげている者だといつたら、お幾つとお聞きになり、あたい、十七歳だとおこたえしたわ。そしたらあたいの顔をまたじつと見直して、あたいのことがみんな解つているふうだったわ、どうかすると、おじさま、あの方、あたいがおじさまのどういう者だかも、ちゃんと解つているらしかつたわ。」

「それは解るまい、いや、解つているかも知れないが、確かに田

村ゆり子といったね、どう考えても、そんな女がいまごろ現われるなんてことは、ありえないことだ、本当のことを言おうか、その田村ゆり子という女は、とうに死んでいる女だ、死んでいる人間があらわれることは絶対はない。」

「まあ、死んでいる方なの。」

「その名前の人なら死んでいる、きみの話した人はその人ではないんだ、怖いか、」

「怖い。」

「思い当ることが何かあるの、こまかく言っごらん。」

「たとえば余りにお綺麗で、何も彼も知っていらっしって、空とぼけていらっしやるふうだったわ、あたい、しじゅう、ぞくぞく

嬉しいような悲しいみたいな、それで気味が悪いような時々いやあな気がしていたわ、死んでいる人だといえはそんな気もしないではないのですが、不思議なことがあったわ、」

「どんなことなのだ。」

「あたい、気のせいか、おばさまの手をにぎって見たくて、きゅつと、握っちゃったの、あら、いつの間にかあたい、その方をおばさまと呼ぶようになってしまったの、わずかの間にそういうふう

に親しくなっていたのね、その時にね、おばさまの左の手に一つの傷あとを見つけたの、金属の擦過傷のようだったので、これ、どうなさいましたと言ったら、すぐ手をお隠しになったわ、あたい、そこに腕時計がふだんから嵌はめられていた痕が、あかくのこ

っているのを眼にいられたの。」

「腕時計のあとだって、」

「それが時計の形とくさりの痕が、まるでその儘ままでのこつていたのよ、だから、あたい、お時計きようはあそばさないのといったら、こわれているものですからと仰有つていたわ、言葉がとてもきれいな方なのね。その時のお顔の色つたらとても悪かった。」

「その傷というのは酷こくなつていたの。」

「そうよ、残酷こくごに時計を手頸てくびからもぎ取つた瞬間の傷あとだったらしいわ、あたい、その訳を聞こうとしたけれど、仰有らなかつた、きつと、おじさまがお奪とりになつたのでしようと言うと、上山さんじゃないと仰有つたわ、その他のことは何も仰有らなかつ

た。まあ、おじさま、何ていやなお顔をなさるの、おじさま、おじさま、慄え出しちやつた、……」

「そんな人が物をいう筈がない、だが、その時計の話はほんとのことなんだ、明け方に心臓マヒで倒れてから、五時間誰もその部屋にはいった人間がいらないんだ、掃除夫が鍵のかかっているドアから何気なくすかして見ると、田村ゆり子は仰向けになって畳の上で死んでいた、その時にまだ時計はうごいていたのさ。」

「だっておじさまは何故そんなお顔をなさるの、また、額から汗がにじんで来たわ、ひよつとするとあぶらかも知れないわ。」

「おじさんの驚いたのは、その女ときみとが話をしたということに、驚いているんだ、きみはその女をまるで知らないくせに、い

ま言うことがみんな本当のことなのだ、その実際のことによられているのだ。」

「お背中をさすつておあげした時、なりの高い方だということが、背中のすじの長いことですぐ判ったわ。」

「どういう声をしていたんだ、声のことを言つてごらん。」

「柔らかくて聞き返す必要のない透つた声だったわ、あたい、あなたにお目にかかったことをおじさまに、みんなお話するということ、お停めしてもきつと仰有つておしまいになるから、おとめしないと仰有つていたわ。」

「そして何か言伝がなかったか。」

「あたいにね、おじさまを好く見てあげてと言つただけだわ、き

ようは十五年振りにお目にかかれたと、それきりお別れしちやつた。いくら呼んでみても振り返りもしないで、出口の方にお往きになったのよ。」

「たしかにその人は田村ゆり子と言ったんだね、きみが介抱してあげた人がぐうぜんに、そんな名前の人だった訳じゃないね、時計のことも、ぐうぜんに似た話だとするより、おじさんの考えようがないんだが。」

「その女の人はおじさまの一体何なのよ。それから聞かないと話が判らないわ。」

「それは田村さんの書いた物をおじさんが読んで上げていたんだ、そうだな、五六年も間を置いて続けているうち、突然、書き物の



原稿を送つて来なくなつたんだ。すると或る日警察の人が来てね、田村ゆり子が昨夜急死したと言つて、おじさんが署に連行されて調べられたんだ、おじさんは家にも来て顔は知っているが、アパートの部屋などにはまるで一度も行つたことがない、だから死因も何も判っていないのだ、警察ではおじさんからの原稿を廻送した封筒から住所が判つたらしく、そんな封筒までちゃんと取つてあつたそうだ。」

「おじさまは女だとお節介ばかりなさるからよ、警察からじや、いやあね。きつとお時計が失くなつていたからでしょう。」

「時計と外に洋服なぞも失くなつていたらしく、牛乳屋さんが配達に廻つたときに、ドアが開け放しだつたそうだが、犯人は出な

かっいたらしい。」

「おじさまの嫌疑は？」

「事件と関係がないことは直ぐ判ったさ、だが、その急死と同時に  
おじさんは永い間見ていた原稿の内容から、田村さんという一  
人の女が、役にも立たない原稿を書きながら死んだということが、  
小説風な情景で頭にのこったのだ。」

「原稿はお上手だったの。」

「ふつうの人と変ったところはない、寧ろ拙い方だったかも知れ  
ないね、ただ、飛び切った二三行くらいの面白いところが処々に  
あつたくらいだ、それは男の人と友達になると、すぐ此の人もだ  
んだんに親しくなつて、言い寄つて来ないかと、それが見え透い

て来ることが恐いと書いていたことだ、そしてその男が田村さんに口説いてくると、一遍に、避けてしまおうという妙なくせのある文章の人だったのだ。」

「おじさまもきつと、引きつけられていたのでしょう。」

「田村さんの小説がそんなふうなので、何時も先を越されている気がしていたんだよ、あの人がいま頃出てくるなんて事はないさ。」

「でも、あたい、ちゃんと見たんだもん。」

「へんな事が重なるものだね、」

「おじさま、何処かでお憩やすみにならない、銀座に来たわよ、あたい、塩からい物がたべたいわ。」

「降りよう、バーに行こう。」

「お酒あがれないくせに、よくこの頃バーにいらつしやる。」

「彼処に坐っていると皆さんの酒気が漂うて来て、頬が熱くなつて酔つたような気がするんだ。」

「いらつしやいませ。」

「何か塩からいものを頂戴、それから、おじさまはなあに。」

「何でもいいよ、匂いをかぐだけだから。」

「あら、金魚がたくさんいるわね、みんな、あたらしい水をほしがって、可哀想にあぶあぶしてひどそうだわ、あの、この金魚の水くさりかけていますから、可哀そうだから取りかえて上げて。」

「毎日お店に出てくるとすぐ、お水かえるんですけれど、きょう

はつい忘れまして。」

「それからお塩をひとつまみ入れてあげて。」

「お塩がいいんですか。」

「くたびれた金魚にはほんのちよつぴり、お塩がいるのよ。おうい、ちびちゃん、お塩気がほしいんでしょう、そう、そうなのね。おじさま、ちゃんともう判つていて、そばに寄つて来たでしょう、なに言つているのか幾らおじさまでも、このヒミツは判りつこないでしょう、お姉さまは何処からどうしていらしたつて、そんなかつこう恰好がどうしたら出来たのと、皆、眼に一杯ふしぎな色を現わして、言つているのよ、口を開けて瞬きもしないであたいを見ているでしょう、あたいも見てやる、」

「きみ、あまり変なことというと、皆がへんな顔をするよ、身元を洗われるよ。」

「あ、お水が来たわ、そのお水ここに頂戴、あたいが入れてあげるから、みんなおつむをならべるのよ、したしたと、……どう、とても、さっぱりと快い気持ちでしょう、したしたというこの音たまらないわね、みんな鱗の色も悪いし痩せているのね、硬い麩ばかり食べているからよ、ほら、好きなお塩よ、それをぐつと飲んで胃ぶくろがひりついたぐあいが、とても、たまらないでしょう、みてご覧、ほら、ほら、眼につやが出て来たし、紅鱗たちまち栄えて来たわ。」

「いい加減にしないか。あの方、まるで金魚のご親戚みたいは何

か言っていていらつしやる。よほど、金魚がお好きと見えるつて言っているじゃないか。」

「人間にあたいの化けの皮がわかるもんですか、おじさま、ひさしぶりで不倖なお友達の様子を見て、おじさまがあたいを大事にしてくださいることが、どんな仕合せだか判つてきたわ、おじさまに、お礼をいうわ。」

「だからね、金魚とお話するの止めるんだよ、皆さん、変な顔をしてるじゃないか。」

「大丈夫、ちび達がはなれないんですもの、あら、白い黧かびのようなおできが出来ている子もいるわ、すぐ取らなくちや大変なことになる、……済みませんがお茶碗一つ貸して頂戴、この子をべつ

にしてかびを取らなくちや、じつとしていて、痛いのを我慢しているのよ、すぐ済むわよ、ほら、剥げたわ、このあとに塩をぬつてと、さあ、もう遊んでもいいわよ、明日はさっぱりするから。」

「お嬢様は金魚屋さんみたいですね、どなたがいらっしつても、金魚のことなんか些<sup>ち</sup>つとも見てくださらないのに、ご親切にして頂いて済みません、皆、お嬢様の方を見上げていますわ、言葉が解るような顔をしているんですもの。」

「ええ、あたいが好きだから、金魚の方でもわかるらしいのね、おじさま、金魚がおじさまのことをあなたの誰だと訊ねているわよ、だからあたいたい、この人はあたいのいい人だと言つてやったわ、そしたら皆がうふふ、……つて笑つているわよ、あのこえ、あん



な賑やかなの聴えて、おじさま。」

「聴えるもんか、みんな金魚つて同じ顔しているじやないか。」

「でも、顔の一つずつがみんな異つているわよ、親子姉妹別々な顔をしているわ、よく、くらべて見ると判るわよ。あたね、お願いがあるんですけれど、きつと聴いていただけのわね。」

「何なの、」

「この金魚いただけじゃないかしら、此処に置くの可哀想だから連れてかえりたいの、みんな不仕合せなんだもの、この儘、見て戻つたら、あたい、気になって今夜はとても睡れそうもないわ。」

「別の金魚を買つて貰うことにしたら、きつとくれるよ、気になるなら買つてあげよう、訳のないことだ。」

「有難う、おじさま、五尾で百円出せばいいわよ、たとに出す必要ないわ、あたい、値段みんな知ってんだから。」

「では百円出すことにしよう。そろそろ帰ろうね。」

「ええ……あら、誰でしょう、誰かが扉の間から此方を覗いて見ているわ。女給さん、誰方か、いらっしつていらっしゃるいわよ。」

「あの人、蠟ろうけつ染ぞめの物を売っている方なんです。おいりようだったら、そう言いませうか、何時もは中に這入はいつていらっしやるんだけれど、今日はどうしたんでしよう、お這入りにならないわ、……」

「あら、ちよつと俟まつてておじさま、きよう会場にいらっしつた方だわ、違ちがいないわ、横顔がおばさまそっくりだもの。おばさま、

おばさまじゃないの、あら、扉から顔を外しちゃった、おじさま、あたい、ちよつと追っかけて行つてみるわ。」

「何言っているんだ。」

「おばさま、田村のおばさま、あたいよ、昼間、お水をあげたあたいよ、ちよつと俵<sup>ま</sup>つてて、其処の小路は行き停まりなのよ、おじさまもご一緒に、先刻からおばさまのお話をしていたところなのよ、ねえ、引き返して頂戴。」

「きみ、人ちがいだよ、蠟けつ染なんておかしいじゃないか。」

「おじさま、表に出ていらつしやい、ほら、此方をお向きになった、おばさまだ、あの方よ、あの方なのよ、行き停まりなものだから、まごまごしていらつしやる。ね、おじさま、堀の処を見る

のよ、真正面で少しの惑いもなく立っていらっしやるじゃないの、見てよ、見てよ。」

「見た、たしかに田村ゆり子だ、幾らばやけたって嘘のない顔だ。」

「おじさま、何か仰有い、おじさまの仰有るのを待っていらっしやるふうだわ、あ、お口が少しずつあいた、お微笑いになった、おじさま、腰をかがめて遂に挨拶なすったじやないの、おじさまもご挨拶をなさい、早くよ、早くするのよ、笑ってお上げするのよ、なんて臆病なおじさまなことか、やつとしたわ。おばさまの嬉しそうな顔だったらないわ、ふだん、あんなお顔で微笑っていらっしったの、凄い美しい顔だナ。」

「きみ、呼んで見たまえ。」

「おじさまが呼んで上げるのよ、あら、おばさま、其処の煉瓦れんが堀いの穴は抜けられないわよ、おからだに傷がつきます、あたい、其処にいま行きますから。」

「行ってつかまえてくれ。」

「死んだつてはなさない心算つもりで、お手々にぶら下がるわ、おじさまもいらつしやい。」

「うむ。」

「おばさま、其処の穴は欠け石でがしがじして危いったら。抜けたつて向う側はどろどろ川なのよ、墜おつこつたら死んじまう。」

「くぐつたね、早いね。」

「あ、穴の外に潜って出ちゃった、あれ、水の音じゃない、ごぼんといったのは？」

「そう、水の音響おとかな。」

「おじさま、また汗とあぶらが先刻みたいに、額ににじみ出たわよ、」

「黙っている、何か聴える。」

「おばさまの声だね、うなっぺいらっしやるようね、水の中からかしら、それとも、……」

### 三、日はみじかく

「あたね、先刻から考えていたんだけれど、こんな立派な入歯をお嵌いれになつても、おじさまは、お年だから間もなく死ぬでしょう。」

「そりや死ぬね、黄金キンの入歯だつて何にもなりはしないよ、けど、これで何でも噛めるから至極安楽だね。」

「齒齲はぐきの作りがみんな黄金キンでしょう、一体、どれだけ目方があるか知ら。」

「何なんもんめ 匆め あるものかな、何故、そんな事を聞き出すんだ、極り悪そうにしてさ。」

「おじさまが死んじやつたら、誰が一等先に入歯を取つちやうか知ら。」

「誰だか判らないな、或いはきみかな、きみは、黄金<sup>キン</sup>をほしがっているんじゃないか。」

「あ、当っちゃった、あたい、おじさまがお亡くなりになったら、それ、誰よりも先に戴くわよ、それで耳輪と指環とをこさえるの、いまからお約束して置いてね、きつと、やると仰有つて置いてよ。」

「やってもいいけれど、口の中に指を入れて入歯を外すときに、噛み附いて見せるから、それが怖くなかったら取るんだね。」

「ほんと、噛み附く気なの、だってお約束だからいいじゃないの。」

「その時の気次第なんだよ、腹が立っていたら、指先をがにつ



と噛んでやる。」

「死んでいる人が噛み附くことなんか、ないじゃないの。」

「口だけ生きのこつてやる。」

「ふふ、そしたらあたゐ、先におじさまの口の中に筆の穂をいれて、まだ、生きていらつしやるかどうか、試して見てからにするわ、擦つたがらなかつたら、直ぐ外すわ。」

「僕は擦つたたくても、じつと我慢していて、指先が口の中にはいるのを待ちうけている。」

「いやよ、そんな意地悪するなんて、くださるものなら、あつさりとくださるものよ。」

「やるよ、死んでまで噛みつきはしない、ただ、そういつて見た

「かつただけだ。」

「先刻からのお話をみんな聞いていて、ボックスにいる方、笑っていらつしつてよ、でも、あの方、おじさまの顔とあたいの顔とを見くらべていて、どんな間柄だかを読んでいるみたいね、あの眼どうでしょう、些<sup>ち</sup>つとも、智恵のまじっていない眼の美しさだわね。」

「利いたふうなことをいうね、ああいう眼をしている人は、も一つ奥の方に別の眼を持っていて、それが何でも見とどけているかわりに、表側の眼はいつも留守みたいに美しく見えるんだよ。」

「誰<sup>ま</sup>方かを俟<sup>ま</sup>つてらつしやるのか知ら？」

「さあね、なかなか好い顔をしている。きみみたいに、やはりば

かんとしているけれど。」

「ご挨拶ね、あの方、あたい達が入つて来ると、すぐ後からいらした方よ、あたいの顔ばかり見ていて、お話しはなししかけるみたいよ  
うに、にこにこしていらつしやるじゃないの。」

「金魚の化けの皮が判つているのかも知れないよ、珈琲は喫まずに水ばかり飲んでいるからだ。」

「あたい、あの方と、お話して見ようかしら。」

「それより出がけに来たてがみを見せてくれ。」

「ほら、はい。これを読むといい気持よ、このお嬢様のお母さまの小説なのよ、いいか悪いかは解らないから、読んでいただき  
いって、お嬢様の手紙がはいっているのよ。」

「こういう場合もあるんだね。」

「お母さまがおじさまに直接に、手紙をお書きになるのが、きつと極りが悪いのね、あたい、こういうお嬢様になってみたい。」

「もう一通のは？」

「おじさまのお家の前を往ったり来たりしているのは、実はわたくしなのでございます、時間は五時、もしおてすきでございましたらお会いくださいませと書いてあるわ、あたい、そのお時間に出て見て、いらっししたらお通しするわ。構わないでしょう、五時なら何時もぽかんとしていらっしやるお時間だから。」

「お通ししてもいいよ、べつにぽかんとしている訳じゃない。」

「だって何もなさらないで、茫乎ぼうつとしていらっしやるじゃないの。」

あたいね、昨日ふいに（海をわたる一尾の金魚）と、書いてみたのよ、とても大きい海のうえに金魚が一尾、反りかえって燃えながら渡ってゆく景色なのよ、そう考えてみたら、あたい堪らなく絵がかきたくなっちゃった、その反歌がふいに出たわ、（山を登ってゆくあたい、）というの。」

「ふむ、（海をわたる一尾の金魚、）か、」

「聞いたのかしら、あの方、こんどは公式にわらい顔をしていらつしやるわよ、きつと、おじさまのお名前を知っている方なのよ、だから、あんしんして笑って聞いているのよ。」

「きみの声が大きいからなんだ、海をわたる一尾の金魚と聞いただけで、ぷつと笑いたくなるじゃないか。」

「金魚はおさかなの中でも、何時も燃えているようなおさかなのよ、からだの中まで真紅なのよ。」

「何故そんなにさかなのくせに、燃えなければならぬんだ。」

「燃えているから、おじさまに好かれているんじゃないの。」

「そうか、」

「おじさまの胃潰瘍だつてあたいが入つて行つて、舐<sup>な</sup>めて上げて、お薬をたんと塗つて上げたから、治つたのじゃないの、あたいの燃えた<sup>リシ</sup>燐があんな大きい胃袋の傷まで、お治ししてしまつたじゃないこと、なに言つてんの、そんな濃厚なお菓子まで召し上れるようになったのも、みな、あたいの<sup>リシ</sup>燐のせいなのよ。」

「それに病院のくすりの事も、わすれてはならないんだ。」

「病院の薬はただの物質だわよ、あたいの鱗と、鱗のぬらぬらは、みんな生きているぬらぬらなのよ、いちど胃腸にはいつていったら、あたい、めだかのように憔悴して出てくるの、おじさまにそれが判らないの。」

「判るよ、大きな声を出すと、ほら、またあの人<sup>が</sup>笑うじやないか。」

「あの方、ここに呼んでみるわ、誰も来もしない人を俵<sup>ま</sup>つなんて、どうかしている。」

「話しかけるのはよしなさい、なれあいの金魚みたいに、人間はすぐ友達になれるもんじやない。」

「それもそうね、あたい達はすぐお友達になつてしまふけれど、

人間はそうはかんたんには、お友達になれないわね。」

「きみ電話だよ、歯医者の治療時間なんだ。」

「じゃ、行ってまいります。此処にいてね、四十分くらいかかるけれど、きょうで、もうお終いだから我慢してね。」

「二人とも歯が悪くては困るね。なるほど、歯医者さんにはちやんと、くちべにはおとして出掛けるなんて、感心だね。」

「でなかったら先生の手も、お道具も、くちべにで真赤になるじゃないの？ どう、とれましたか。」

「とれたよ、くちべを取ると、まるでぼやけた顔になる。」

「くちべには女の灯台みたいに、あかあかと点っているものよ、消えたら、心しんまでしよんぼりしてくるわ。じゃ往って来ます、あ



の、それから、あの方とあたいの留守中仲よしになったら、きかないわよ、うふ、あたいつて妬きもちやきだわね。」

「大きな声を立てると聴えるよ、ほら、お金、」

「きょうのおきまりの煙草はもうあがっているから、あとは半本だってお喫みになつちやいけないわ、煙草の箱、持ってゆくわよ。」

「一本だけ置いて行ってくれ。」

「だめ、つい一本が二本になるから、煙草を見たら、毒と思えと  
いうことがあるわ、温和しく俟<sup>ま</sup>っていらつしやい。じゃ、往つて  
来ます。」

「あら、何時かのおばさま、ほら、講演会でお会いしたおばさま、あたい、ちらつと見て、すぐ判っちゃった。」

「お一人じゃないわね、ずいぶん、大きくおなりになったのね。」

「おじさまとご一しよなの、さあ、行きましよう、おじさま一人でお茶喫んでいらつしやるから、恰度、ちようどいい時分だわ、何時か

袋小路でお逃げになったでしょう、でも、きようは放さないわよ。  
」

「きようも急ぎの用事があるんで、こうしてはいられないの。だから、おじさまにはお会い出来ないわ、あなたとだけ、ちよつぴりお話するけど。」

「そんな事いわないで、いらつしつてよ、おじさまはきつとお喜

びになります、妙ね、齒のお医者様の所にくると、きつと、お目に懸れるなんて、此間もそうだったわね。此間はどうしてあんなにお逃げになったの。」

「羞かしいからでしょう、こんな穢きたない恰好かたがたしているから、お会いしたくないのよ。」

「ちよつともいいんですからいらっしつて、ここ、放さないわ。」

「おじさまは、あなたを可愛がって、くださる、……」

「ええ、そりやもう、何だつて言うこと聞いてくださるわよ、あたいのお臀かゆだつて痒かゆいって言えば、搔かいていただけけるし。」

「まあ、お臀かゆだつて、……」

「あたいがこんなに小ぢやいでしよう、だから子供だと思つていらつしやるのよ、ほんとは、あたい、子供なんかじやないんですけれど、そして何だつて知っていますのよ、おばさまがお会いにならないわけも、ちゃんと判っているのよ。」

「では、その訳いつて頂戴、どうしてお会い出来ないかということをね。」

「おばさまは、うれしいでしょう、だからお会いになれないのでしよう、ほら、へんなお顔になつたわ、むかしのうれしいは、川のそばの柳の木の下にいたけれど、このごろは、ビルの中からも出ていらつしやるわね。」

「そのうれしいが物を言うのね、ほほ、でもあなただつてうれ

いじゃないこと。」

「あたい、生きてぴんぴんしています、何でも食べているし、決して逃げたりなんかいたしません。」

「いたしませんけれどね、人間に旨く化けていらっしやるじゃないこと。」

「ばれちやったわね、おじさまが小説の中で化けて見せていらっしやるのよ、もとは、あたい、五百円しかない金魚なんです。それをおじさまが色々考えて息を吹きこんで下すっているの、だから、水さえあれば何処にでもお供が出来るんです、そしてあたい、甘ったれるだけ甘ったれていて、何時も、おじさまをとろとろにしているの、おじさまもそれが堪らなく好きらしいんです

。  
「

「あの方は元からそういう方なのよ、めだか一尾水盤に入れて、いち日じゆう眺めていらつしやるような方なのね、何が面白いんだか判らないけど、飽きることもないらしい、そして突然顔をあげると街の中を歩くために、お家から飛び出しておしまいになる、……」

「そしておばさまとお逢いになる、おばさまは何時の間にか死んでおしまいになった、そのお化けさんがおじさまの隙間を見つけて、所と時間を構わずにおはいりになる、……」

「そこで金魚のあなたに見附けられたということに、なるわね。でも、金魚を見附けたことはさすがにおじさまだけけれど、金魚だ

つて当節油断がならないわよ、あなたみたいな大胆な金魚もいるんだから。」

「あたいね、金魚だつてこと見破られたこと、はじめてなの、何時もそれが気になるんだけど、うれしいのおばさまに会ったら、かなわないわよ、けどね、おばさまがうれしいだということ、ほんとうの事か知ら？」

「触つてみるといいわ、冷たくないでしょう、ほらね、ここに手をいれてみたつて判るでしょう、こんなに、ほかほかと温かいでしょう。」

「ええ、おっぱいもあるし胸のふくらみもあるわ、やはりうれしいという事はうそなのね、あたいの金魚だということは本物だけ

れど、あ、おばさま、何時の間にか来ちやった、此処なのよ、ほら、彼処に一人でぽつんとして坐っていらつしやるでしょう、あれもゆうれいのおじさまかも知れないけど、ね、お這入りになつて、ちよつとでもいいから、逢つておあげしてね、あら、先刻の人がそばに来て何か言っているわ。」

「じゃ、わたくしこれで。」

「だめだと言ったら、顔だけでも見せておあげしてよ。」

「わたくしの方で顔を見たから、それでいいのよ、おじさまはわたくしなんか見なくとも、見る人がたくさんおありになるんですから、じゃ、大事にしてあげてね。」

「また往つちやった、何て脚の早い人なんだろう。おじさま、た



「だいま、あら、ご免遊ばせ。」

「この方はね、先刻の手紙の方なんだ、きよう夕方いらつしやる筈だったが、丸ビルに用事があつていらつしつて偶然に出会わして、あとを蹤つて見えたんだそうだ、はは、後をつけたなんてこれは失礼。」

「でもおつけしたことは実際なんですもの、お目にかかれてとても嬉しゅうございますわ、齒の方、ほうお治りになつたんですか。」

「ええ、もうすつかり、……」

「では、わたくし、これで失礼いたします。」

「そお、その内、宅の方にいらつしつて下さい。」

「ご免遊ばせ。」

「変な方ね、あたいが帰ってくると、碌ろくに話もしないで往くなんて、あの方、おじさまがとうから知っている方なんでしょう、それをあたいがまだ子供だと思って、誤魔化していらっしったのね、ちゃんと判るわ、あたいのいない間にたんとお話したのでしよう。どうも、にこにことお話したそうな様子がおかしいと思っっていたら、当っちゃった、何、お話していらっしったの。」

「きみの事さ。」

「あたいの何をお話していたの。」

「きみは僕のお嬢さまかと聞いたから、まあ、そんなものだと答えただ。そしたら、とても、お小さいけれどもお利口そうだと言っていた。」

「妬きもちやきで困ると、仰有ったのでしよう。」

「それも言つて置いたよ、何でも油断のならない子だと、」

「あたいが金魚だなんて、仰有りはしなかつたでしようね。」

「それは言わなかつた、言つても本当だとは思わないからだよ、金魚がそんなに巧く人間の形をととのえることは、予想以上のことなんだ。」

「で、一体、何のご用があつたの。」

「ちよつとした事だ、きみに言つたつて判りつこのない事だ。」

「たとえば？」

「きみには判らないことなんだよ。」

「あたいに判らないことなんか、一つもない筈よ、匿さないで言

つて頂戴、あたいはじめあの方に好意を持っていたけれど、おじさまを奪りあげるような人は、ことごと悉くみんな敵に廻すわ。」

「手厳しいな。」

「何か隠していることおありでしょう、きつと、隠している。」

「隠してなんかいるものか。」

「お顔の色が曖昧だよ、気を付けて、誤魔化そうとしていらつしやる。おじさまは、そんな時には、眼をあたいからそつとお外らしになるもの。」

「もう、此処を出ようじゃないか。」

「白状しなきや出ないわ、何時までも、坐つててやる。」

「じゃ、きみ一人いたまえ。僕はもう帰るから、給仕さん、勘定

して下さい。」

「とうとう、白状しなかつたわね、じや、あたしも、或る女の人に会ったこと言つてやらない。」

「誰に会つたの、廊下かね。」

「そんな事いう必要はないわ、おじさまが言わないのに、誰がいうもんですか。」

「例の講演会であつた人の事だろう、きみの知っているのは彼あの人の外には、凡そ人間のうちに誰も知っていない筈だ、どうだ當つたろう。」

「巧くお当てになつたわ、以心通じるものがあるのね、あの方、突然、廊下であたいを呼び止めたの、おじさまが来ている事、ち

やんと知っていらっしったわ。」

「僕には逢いたくないと言っていたらどうだろう。」

「あんまりお逢いしたい時には、逆に人間は逢いたくないというものらしいわ、それでいて、逢わないで帰ってゆくのは、なんとも言えないつらい気分があるらしいわ。」

「どんな顔色をしていた。」

「ええ、お顔ははれぱれしていましたが、脚が早くて別れたとおもうと、もう、階段を降りていらっしった。あたい、おじさまに釣られてみんな言つて了ったけど、まだ、おじさまは彼の<sup>あ</sup>人のことは些<sup>ちっ</sup>とも話さないわね、一たい、どういってお話をしていらっしったの。」

「引つくるめていうと税金の話なんだ、あの女はこの頃、何でも働きつづめてやっと穴を抜け出したらしいの、穴って抱えの家のことなんだがね、そしたら二年分の税金がどかつとやって来たというんだ、二年間で八万何千円という税金の告知書を目の前に置いて、眼がくらんだそうだ、それを抱え主がすぱつと払ってくれたんだ、べつに頼みもしないのにね、そこで、ほら、あの女はもとの商ばいに逆戻りさせられるということになるんだ。」

「税金がまた穴ん中にあの方を突き墜したことになるのね。やつと匄<sup>は</sup>い上ったところを、頭から無理やりに突き戻して了ったのね。」

「僕はそんな話を初めて聞いたが、税金を払うためにね、どれだ

けの人間が死ななくともいい命を死んだことか。」

「その税金の女の人とおじさまと、どんな関係があるというの。」

「関係はないんだけれど話だけは聞いてくれというんだ、だから僕は話を聞いたのだ、あの女が抱え主から逃げ出したことを聞いたのだ。」

「払えないものね、ところでおじさまにその金払ってくれというの。」

「きょう会ったばかりの人が、そんなことをいうものか。」

「では、おじさまのお名前を知っているということだけで、それを言いたかったというの。」

「そうだ、巧く言いあてたよ、わたくしはそれ以外に何ものぞま



ないと言っていたけれど、僕はこういつて見たのさ、では、あなたは或る特定のお金をさしあげれば、僕と食事をし一日遊んでくれますかと言ったら、ええ、と答えてくれた、では、あなたはいま僕の言ったような事をいう相手に、みなそういうことを希み、またそれを平気でやりますかというのと、多分、それはそう致しますまいと答えていた、つまりその女は頭をつかう仕事が見た目というんだ、事務員とか経理の方とかの、頭のいる仕事を見附けたいと言いつづけていたのだ。」

「ところでおじさまはどう仰有って、あの方のみちを開いてお上げになったの。」

「僕は煙草のケースを進呈しただけだ。」

「ケースの中に、何時もの癖で、お金匿して持っていていらつしたの  
でしよう。」

「うむ、まあね。」

「どうも煙草を取り出すふうもなさらないのに、ケースをよく持  
つていらつしやると思つていたわ。女の人はそれを平気で受け取  
つたの。」

「貰つてもよい人から貰つたふうで、受け取つていたようだ、そ  
してわたくしどのように仰有ることをおつとめしたらいいのでし  
ようかと、真面目な顔附で言つたのだ、きみの言い分ではないけ  
れど、叡智えいちのない水みたいな眼で、僕をおだやかに見ていた。」

「で、おじさまは、何かお約束をなさいました。」

「僕はまた割りのよい仕事で金は取れることもあるんだから、その金で逃げられるだけ逃げなさい、いまのあなたには逃げるより外にみちはない、誰でも人間は逃げなければならなくなったら、姿を消すにかぎるといったら、わたくしもそれに限ると思いますと言った。で、ね、きみ、この女の人はきょう出掛けに僕の前をぶらぶらしていて、僕らが出かけたあとから、ずっと街まで蹤けて来ていたんだ。」

「おじさまは、底なしに女にあまいわね。」

「僕があまいんじゃないやなくて女の方があまいんだ、僕は断ることは知っているし、知らぬ他人に誰が金なぞやるものか、ところが人間の心にはずみが出来る瞬間には、実に綺麗に相手に応ずる気合

があるもんなんだよ、つまり割りのよい仕事が廻って来て失ったものを、別の人間が返してくれる場合だつてあるものだ、その予測というものが経験の中に生きているとしたら、生涯のある日にはそんな事の一遍くらいしたつていいんだよ。それをしないのは、人間の価値をなくする吝な奴の仕業なんだ。」

「その後で女の方が、おじさまの後を趁おうて来たらどうなさる。」  
「趁えば趁うて来るで、いいじゃないか。」

「しまいに、ぐるぐる捲きに捲いて来るわよ。」

「その時はその時だ、捲かれてよかつたらそのまま捲かれていてもよいし、悪かつたら抜ければいい、情痴じょうちの世界はその日ぐらしでいいもんだよ。」

「税金といえばあたいにも、税金がかかっているわ、金魚屋さんにいた時、おじいさんは税金をこまかく計算していてね、一尾ずつにみな少しずつかけていたわよ。」

「きみの五百円は高かった。税金が二割くらい、かかっていたんだね。」

「では、念のためにおじさまにお聞きいたしますけれど、たとえばあたいを売ってくれという人が現われて来たら、おじさまはお売りになるかしら。」

「売らないな、こんないい金魚はいないからな。」

「耳の穴のお掃除もするし、お使いにも行くし、何でもしているんですもの、売られてはたまらないわ、でも何万円とかいう大金

を出す人がいたら、きつと、お売りになるでしょう。」

「何万円も出すばかりはないし、第一、人間のまねをする金魚なんて何処を捜してもいないよ。」

「じゃ、あの女におあげになったケースの中にあつたお金ね、あれだけ、あたいにも、くださらない。」

「あれは偶然にそうなつたんだが、いま更めてそう切り出されると、ごつんとつか問えてくるね、こだわりが感じられてすらすらと出せない。」

「知らぬ人にお金をあげていて、あたいに、ぐずぐず言つてくださらないなんて、そんな法ないわ。」

「その内に出してよいものなら、出すことにする。」

「一たい、あのケースに幾ら入っていたの、あたいたい、それと同じくらいのお金戴きたいわ。」

「同じくらいなんて莫迦言いなさんな。」

「だから幾らあったのか、それを言つてよ。」

「よく覚えていないね、ねじこんで入れて置いたんだからね。」

「自分のお金の高が判らないなんて、そんな鈍間のろまなおじさまじゃないでしょう、はつきり正直にいうものよ、指これだけはいつていたんでしよう。」

「そんなにはいるもんか、二つ折りにしてあつたんだから。」

「じゃ、これだけ？」

「それも当たらないよ、まあ、二本くらいが精せいぜい々ぜいなんだ。」

「嘘おつしやい、ほら、また曖昧な眼附をして、お外らしになつた、ちゃんと、どんな時どんな顔色をなさるかかっていう事、毎日研究しているから解るのよ、これだけは確かにあつた、……」

「それほどはなかつた。」

「うそつき、あんな女にお金やって、あたいにちよつぴりしかくれないなんて、ごま化そうとしたつてだめよ、同額でなきや承知しないから、正直にお出しになるがいいわ。」

「きようは外に金は持っていない。」

「出掛けに社の方が持つていらしたお金ある筈よ、まだ、状袋にはいったまんまのお金だわ、お出しにならなかつたら、からだじゆう調べるわよ、怖いでしょう、さあ、いい子だから、お手々



あげてお襦袢じゆばんにポケットがついていて、そこにちやんとお金は  
いつている筈よ、ほら、ご覧なさい、こんなにずつしりと状袋が  
重いくらいだわ、これ、みんな戴いとくわ、そしたらあの人にあ  
げたお金のことなんか、もう言い出さないから、いい気味ね、べ  
そを搔いたみたいな顔をしているわ、あたい、これで先刻から詰  
っていたものが、ぐつと一ぺんに下がっちゃった。」

「夕食はきみが払うんだよ、」

「いいわ、奢おごってあげるから何でも。」

「金魚でも女という名がつくと、なまずのような顔をする。」

「おじさまは懲らしめることの出来ない人間だから、うんと懲ら  
してあげるのよ、あたい、つねづね、なまずにもなって見たいし、

ぬらぬらしうなぎした鰻にもなつて見たかつたのよ、変つたお魚さかなを見ると  
すぐその真似まねがして見たくなる、一生ぴかぴかした金魚になり澄  
ましているのは、意気地がないし退屈で窮屈なんだもの。しまい  
に、くじらにでもなつて、海のまん中でお昼寝してみたいわ。そ  
したらね、おじさまを背中せなかにちよこんと乗つけてあげるわよ、泳  
げないおじさまはあたいの背中から、逃げ出すことが出来ないも  
の、何処へも、あの女のそばにも行けなくなつて、背中で死んで  
おしまいになるかも判らないわ、でも、お背中で亡くなつてくだ  
すつたほうが、あたいには気がらくで、とても嬉しいわ。」

「昨夜の運転手さんには、あたいも、まいっちやつた。そんな娘

か孫のような若い女と一緒になら、料金の倍くらいはお払いになつたつていいじゃないかと、ゆすられちゃつた。それをおじさまつたら、それもそうだ、君から見れば倍額の請求は当然だとか言つて、お払いになつたじゃないの。」

「あの時は僕の心はおちついてた、何を言われようがそれがちつとも、腹に承えないで、相手の心をそのままにして置きたかつたのだ。僕には不思議にそんな氣のする時があるんだよ。」

「でも、さすがに温和しくお払いになつた後で、運転手が言つたつて、どうも、つい独り身なもんですから、ご無理を申し上げましてと言つて謝つていたわね、きつとお払いにならないと思つて厭がらせのつもりだつたのね。」

「あの時にきみはひと言もいわなかったのは、よかったね。ここにこして面白い事がはじまったという顔つきでいたのは、よい家庭に育ったお嬢さんみたいだったな。」

「あたいもそんな気がしていたわ、どうせ、おじさまはお払になるんでしようし、年もたいへん違うことも実際ですからだまっていたの、そしてね、あたい、あれほど人間なみに見られたことも、生れて初めてだったのよ、あたいも、えらくなつたとそう思ったくらいだわ。だってあたい達の仲間はみんな酷い飼われ方をされているんですもの。」

「どうして金魚はみんながつがお腹が空いているの。どの金魚もまたたきもしないで、空と餌ばかりさがし廻っているじゃない

か。」

「一日餌をやっていて二日わすれている人達に、あたいは飼われてるんですもの、何時だってお腹が空いてひよろひよろしているわけだわ、だから、眼ばかりつン出てしまっているの、世界じゆうで一等酷い目にあっているのは、人間じゃなくてあたいは仲間だわ、岩と岩の間に通路をこさえてあつて、そこを泳ぐのが人間には面白い見物みものらしく、無理にがじがじした岩の中を歩かせるんだもの、尾も鱗も剥がれてしまう。」

「きのうも死んだ金魚が道ばたに、何尾も干からびて捨てられてあつた。」

「おとといも、あたいまも、眼の動かない金魚を一尾見たわ。生き

ている間も碌々食わさないうで、死んだら道路におっぽり出すなんて酷い仕打だわね、お腹に砂金があるとアメリカ亜米利加の或る学者が、まんまとかついで見たけれど、あれはアマゾンのまむしみたいなお魚だったのね。」

「きみは大学では、何をやっていたんだ。」

「知れているじゃないの、編物と、そこから美容術と、魚介の歴史と、それくらいなものよ、おじさまもいい質問をしてくださるわね、きみは大学で何をやったなんて他人が聞いたら、本物だと思っじゃないの。」

「そのつもりで用心ぶかく言っているんだ、僕はね、何時でも男だから女の事を考えてばかりいるが、女の方では、男の事なんか

些つとも考えていないと思つていたんだ、実際はそうじゃなかつたんだね。」

「それはこういう事なのよ、女も男と同じくらいに、五対五の比率でいち日男の事ばかり考えているのよ、男の方からいうと、男ばかりが女の事をたくさん考えていると思うでしょう、実際は半分半分なのよ、朝ね、お顔を洗つてお化粧をしているでしょう、あの時だつて男のことを一杯に考えているのよ、散歩とか食事とかを一人でするときにも、やつぱり男以外のことなんか考えていないわ、尾籠びろうなはなしですけど、ご不浄びじょうの中なかにいる時だつて、やはりそれを考えつづけているのよ。」

「どうして廁かわやの中で考える事がきちんと何時はかども捗はかどるんだらうね、

厠で考えた事は、何時も正確で後悔はない。」

「それから一つ、お夕方に勝手に勝手でお茶碗やお皿を洗っている時があるでしょう、せとものがかちかち触れて鳴るでしょう、そしてその水をつかう音とせともの音が、突然、静まって音がしなくなり、しんとして来る時が不意にあるでしょう。」

「あるね、」

「あの時にね、どうして手を休めなければならぬか、ご存じなの。」

「知らない。」

「つまり女が男について或る考えに、突然、取り憑かれてしまつて手が動かなくなるのよ、ほんの少時といつても瞬間的なものだ



けれど、どうにも、身うごきの出来ないくらいに考え事が、心も身もしばりつけて来る瞬間があるのよ、あんな怖い鋭い時間ないわ、予感などがなくせに突然やってくるのよ、前後の考えに係なく、不幸とか幸福のどちら側にいても、そいつがやって来たら動けなくなるわ、内容は種々あるけど、はつきりと分けて見ることは出来ないけど、それがやって来たら見事にしばらくその物が往つてしまうまで、にら睨んでいても、見過ごすよりほかはないのよ。」

「男にもその茫然自失の時がある、厠の中なんかでそいつに、取っ憑かれると放してくれない奴がいる。」

「名状すべからざるものだわね。」

「まさにそうだな、名状すべからざるものだ。つまり名状とまでゆかない生々なまなましたものだ。きみはそんな時どうする。」

「あたい、じつとしてゐるわ、その考え事がすうと通りすぎるまで待つより外ないわ、来ることも迅いが、去つてしまうのも、とても素早い奴なのよ。」

「それ何だか判るか。」

「きょうという日が、あたいならあたいの中に生きてゐる証拠なんでしょう。」

「そう言うより外に、言いようがないね、」

「それは嬉しいような場合がすくないわね、嬉しい事というものはそんなふうには、来ないものね、嬉しくないこと、つまり悩む

ということからはからだの全部にとり憑いてくるわね。」

「そろそろきみの飯どきだ、時計が鳴ったぞ。」

「ヘンデルの四拍子ね、ウエストミンスター寺院のかねの音いって、あまくてあたいには、恰度ねむり薬みたいに宜く効くわ。」

「外まで鳴ると、聴えるか。」

「え、お池のうえに寝しずまると、じゃんじやんと聴えてまいります。おやすみと言うようにも、また、合唱をしているようにも聴えて来ます。」

「きみは晩には水にかえってゆくが、かえって往くことを何時だつてわすれたことがないね。」

「そしたら死ぬもの。」

「きみを何とか小説にかいて見たいんだが、あげく挙句の果にはオトギバナシになって了いそうだ、これはきみという材料がいけなかつたのだね、書いても何にもならないことを書いて来たのが、まちがいの元なのだ、おじさんの年になつても未だこんな大きい間ちがいを起すんだからね、うかうかと小説というものも書けないわけだ、何の某がどうしたああしたとか、不二子さんとか令子さんがああしたこうしたとも、もう極りが悪くて書けないし、いよいよ、おじさんの小説もこんどこそお終いになつたかな。金魚と揉み合つてのたれ死しにか。」

「はたき尽してあるだけ書いておしまいになつたから、あたいを口説いたんじゃないこと、誰もほかの女に持つてゆくには、あま

りにお年がとりすぎているから、けんそんしてあたいを口説いて見たわけなのよ、そしたら金魚のくせに神通自在で、ひよつとしたら人間よりかなお知る事は知っていると来たのでしよう。で、書くことの狙いが外れちゃった訳でしょう。」

「はかないね、小説家の末路というものははかない、いま恰度、其処を何も知らずに、僕は帽子をかむって、てくてくほつ附き廻っているようなもんだ。」

「はかないという口くせで、きょうまでやっていらつしつたんじやないの、だから、後は仕方がないからそのはかないことばかり書くのよ、はかない人間がはかない事を書くのは当り前のことだわよ、金魚の事は金魚のことしかかけないし、人間は人間のこと

しか書けないのよ。」

「よし判った、ではゆっくりお休み。」

「おやすみなさいまし、明日また。」

「今夜はおじさんと寝ないんだね。」

「きようはくたびれちやって、おじさまを喜ばせるだけの体力が、あたいに、なくなっているのよ。」

「小さいからね、では、勢よく、どぶんとお池に飛びこめ、」

「どぶんと飛びこむわ、一、二、三、と、あ、わすれた、明日はとこや理髪店に行く日なのよ、お忘れにならないで、……」

「有難う、ちんぴら。」

「よいしょ、どぶん、……と、お池の神さま待ち兼ねや。」

「日がみじかくなつたわね、四時半というのに、もう暗いわ。だんだん寒くなつたらどうしましょう、お縁側に入れていたただかなくちや、池が氷つたら、あたい、死んじまう。」

「硝子の鉢に入れて日向に置いてあげよう。」

「硝子の鉢はね、四方から見られるから羞かしいわ、あたい、何時でも裸なんだし、みんな見られてしまうもの。」

「じゃ別の鉢に入れよう。」

「え、そうして頂戴。あら、誰かが呼鈴を押したわ、お客さまよ、いま頃、誰方でしょう、もうお夕食の時間なのに。呼鈴もたった一つきりしか鳴らない遠慮深いところからみると、女の方らしい

わ。」

「困るな、もう飯だし、……」

「出て見るわ。いらっしやいまし、誰方様でしようか。」

「ちよつと、お宅の前を通りあわせたものでございますからついで。」

「あの、ご用向きは何でしようか、ただ今からお夕食をとることになっているんですが。」

「用事などはございませんけど、ただ、ちよつとお会いできたらと思ひまして、あの、変なことをおたずねするようでございますが、あなたさまは、奥さまでいらっしやいますか。」

「いいえ。」



「お嬢さまでしようか。」

「いいえ。」

「ではお手伝いの方なんでしょうか。」

「いいえ。」

「秘書のようなお仕事をなすつていらつしやるんですか。」

「そうね、あたいにも宜くわからないんですけれど、秘書みたいな役なんでしょうね、おじさまの事は何でもしてお上げしていて、それで、おじさまがお喜びになれば嬉しいんですもの。」

「おじさまなどと、平常おつしやつてらつしやるんですか。」

「ええ、おじさま、おじさまと申しあげていますわ、併しあなたさまは誰方なんでしょう。ちつとも先刻からご自分のことは、仰

有らないじゃありませんか。」

「わたくしはあなたを見たので名前も何もいう気がしなくなりました。可愛いあなたがいらっしつては、お会いしてもくださるまいし、おあいしても、帰れと仰有るかも判りません。」

「変なことを仰有るわね、それでは、おじさまのむかしの方であらっしやるんですか。」

「もうだいぶ前に亡くなっている女なんですから、お訪ねしてもむだだとは思いましたけれど、女のはかなさで、ついお立寄りしたのでございます。」

「と、仰有いますと、あなたはゆうれいの方なのね、」

「ええ、ゆうれいなのでございます。」

「おじさまはどうしてうれしいのお友達が、こんなに沢山おありなんでしょうか、も一人のうれしいは講演会にまでいらつしたんですが、まるで本物そっくりに作られていました。あなただつてこう見たところは、間違いない本物の女の方かたに見えるんですもの。このごろうれしいごっこが流行はやるのかしら。」

「あなただつて、それ、そんなに、巧くお上手に化けていらつしやる。」

「まあ失礼ね、でも、驚いちゃった、今まであたいの化けの皮をはいだ人は一人しかいなかったのに、あんたは一見、すぐ剥いでおしまいになったわね、どういふところでお判りになります、：

…」

「言葉づかいの甘ったれ工合でも判るし、第一、人間はそんなに絶え間なくブルブルと顫ふるえてはいしません、ちつとも、おちついていらつしやらない。」

「これから気をつけるわ、あたいね、毎日、もう寒くてぶるぶるしているんですもの、でも、あんたの化け方は巧いわね、それに煙草でも喫んでお見せになったら、にせ物だとは誰も氣附かないわ。」

「先刻ね、何でもおじさまの事はしてお上げすると、仰有ったわね。」

「ええ、言ったわ。だから、外の方には一さい何もして貰いたくないんです。あんただってお通しすれば、何をなさるか判りはし

ない。」

「じゃ、お通ししてくださらないのね。」

「ええ、まあね、かんにんして戴くより外はないわ、お送りかた  
わら、そこらまで歩きましょうか。」

「どうしてお取次してくださるのが、おいやなんですか。」

「いやだわ、もう、寒くなるとあたいは、からだの自由が利かな  
くなるんですもの、あたいがいなくなったら、毎日でもいらつし  
やい、その前にゆうれいだということをおじさまにそう言つて置  
きます。京都の病院で手術して死んだ方だと申し上げて置くわ。」

「あの時にも、手紙一本下さらなかつた。」

「だってあんたは外の方と朝鮮まで、かけ落ちまでなすつたので

しよう。おじさまを打ちやらかしておいてね、そして四十年振り  
りに手紙をくれと仰有るのは、無理だわよ、書くにも、書きよう  
もなかったらしいんですもの。」

「あの時は手術後で、わたくしは弱って死にかけていました、そ  
んな時妙なもので不意にあの方の手紙が読みたくなつたのです。  
生きた人間の書いた字というものが人間の死際にも、きゆうに見  
たくなつて来る時がございますもの。むかし沢山いただいた手紙  
に、まだ洩<sup>も</sup>れている何枚かがあるような気がして、それを書いて  
いただきたかつたの、そしてまだわたくしという者がその中にほ  
んのちよつぴりでも、のこつていたらそれを読んで死にたかつた  
んです、わたくしは毎日の注射でいのちをつないで、お手紙ばか

り待っていました、二日生き三日生き、そしてお手紙を待っていたんですもの。」

「それがとうとう最期まで来なかったのね、あんなに女にあまいおじさまがそんな薄情なことが、平気でしていられるのかしら、想像も出来ないわ。」

「それはわたくしの仕打があまり悪かったからでしょう、恰度、わたくしが結婚する二日前におあいしたときにも、黙ってかくしていました。そして二日後には、もう逃げるようにして結婚して了ったんです。」

「騙し打ちだわね、そりやあんまり酷いわ。」

「口に出してはいえないことだし、とうとうそんなふうになって

了ったのです、お会いして今言おうか、ちよつと後で言おうかと迷いながら、ずるずるに言うことが出来なかつたんです。」

「おじさまの怒りが四十何年の後にも、まだ、いま怒つたばかりのようになまなましいのは、あたいによくわかるわよ、それはあなたのやり方が余りに悪いのよ、それでいて今頃お会いしたいなんて宜い気なものね、いくら死んでいたって、取次いであげないわよ。」

「けれどわたくし、未だあの方が怒つていらつしやるという気持ちに、<sup>すが</sup>縋つて見たい気がしているんです。そこにまだあの方がわたくしに残していらつしやるものが、消えない証拠があるんじゃないでしょうか。」



「誰が騙し打ちをした人に気があるものですか、縫られて堪ったものじゃないわ。」

「お慍りになったわね、わたくし、正直に申し上げただけけれど。」

「慍るも慍らないも、ないわよ、何のために今どきうろうろ出ていらつしやるの、あたいのいる間、いくらいらつしつたつて、何時だつて会わせて上げるもんですか。」

「だからその訳をいつてゆつくり一度はあやまって見たいと、そればかり考えて、うかがつて見たんです。」

「いまから幾ら謝りになつても、受けた<sup>きず</sup>痕あとがそんなに簡単に治るもんですか、あやまるなんて言葉はどうに、通用しなくなつ

ているわよ。」

「怖い方ね、見かけによらない方。」

「おじさまは莫迦でいて女好きだから、あ、よしよしと仰有るかも知れないが、あたいの眼をくぐろうとしたって、一步もお庭の中にも入れはしない。」

「では、帰ることにします。やはり来るんじやなかった。訪ねても何にもならない事は、気のせいか、判っていたんだけれど、」

「つい来たくなつたというのでしよう、本物のお化けなら門からふうわりと飛んで往つて、おじさまのお書齋に行つたらいいでしょうに、そんな勇敢なまねも出来ないくせに、」

「そうよ、そんな勇氣なんか微塵もないのよ、ただ、しよげて帰

るだけですわ。」

「早くかえつてよ、門の前では人が立ち停つて見るし、この上、困らされてはとても迷惑千万だわ。」

「では、また、ご機嫌の好い時にうかがうわ。」

「二度といらつしやらないでよ、何てぬけぬけした化け者でしょう。あんな女と若い時につきあつたおじさまだつて、おつちよこちよい極まるわ。一遍、男を振つて置いて、自分で逢いたい時には化けて出るなんて、都合の好い化け者もこの世の中にはいるもんだナ、あばよ、おととい昨日お出でだ。」

「どうしたの、永々と話をしていて、此方にちつとも、お客さま

の案内もしないじゃないか。」

「やつと帰って行ったわ、お目にかかりたいといったから、いま、お食事はじまるんだからって、お断りしたわ、それでいいんでしょう。」

「どんな顔をしているか見たかったね、四十五年も会わない人なんだ。」

「役者みたい白い顔をしていらっしった。むかしのまんまのお顔らしいわ。手術の後では、よほど、お逢いしたいふうな話だったけれど、おじさまをたすけなかった人は、こんどは、此方で見事に手厳しく振ってやったわ。」

「あの頃のおじさんはね、とても、正気の娘さんではつきあつて

くれない男だったんだよ、つきあう方がどうかしている、拙い顔をしてるし、生意気だし、なりふりだつて破落戸ゴロツキみたいだし、お金はないしね、そんな奴に相手になる女なんて一人もいはしなかつたんだよ。」

「だつて女の人に眼がなかつたとも、言えばいえるわよ、幾ら穢きたない恰好していたつて若さが物言うじやないの。若い男つてどんな不恰好な顔をしていらしても、皮膚はぴいんと張つていて、それだけでも、一生のうちで一等美しい時なんだもの。」

「ところがキミ、僕ときたら、若い時分からジジイみたいな半老はんぼケの面ツラをしていたんだ、いくら剃つても髭はぎしぎし生えるし、毎日お湯にはいっても顔はきれいにならない、僕はね、その時分

流行っていたカイゼル型の髭を生やしていたが、この髭ときたら、その頃の写真を見ただけでも、ぞつとしてくるね、何しろ生やし際はまだ薄いもんだから、ひそかに墨を刷いていたこともあるんだ。」

「あら、可笑しい、お髭を生やしていらつしたら、どんなお顔になるか、想像も出来ないわ、大体に於て人相好くないわね。」

「暴力団か、ゆすりの類だね。」

「でも墨をいれていたのは、ちよつと、哀しいじゃないの。」

「あさましい限りさ、それにお金は一文もないと来たら、どんな娘さんだつて寄り付きはしない。」

「おじさまも、そんな時があつたのかな、すべからく、人は勉強

して成人すべきだわね。」

「生意氣いな、だから、きょうの人、ちよつとくらい通してもよかつたね、あれでも、おじさんの家にも来てくれたし、僕も訪ねて行ったが、何時でも帰りぎわには、手、手と玄関のくらがり、お母さんに見られないように握手をしてくれたもんだよ。」

「握手がそんなに重大な意味があつたの。」

「握手がいまのキスみたいに、効果があつた時勢だつたんだ。」

「そお、それなら、少<sup>しばらく</sup>時でも、お通しすれば宜かつたわね、あたい、おじさまを振つた女だと思つと、無性にかつとしちやつて、おじさまに会わせてやるものかという、気が苛<sup>いらだ</sup>立つて来ていたんですもの。」

「きみはすぐかつとするね。」

「燃える金魚というけれど、ほんとは温和しくみえても、すぐ、ほねの中までかつと燃えて来るんだもの、でも、あたいにね、あなたは奥さまでいらっしやいますか、それともお嬢様なんですかとお聞きになったわ、あたい、つい赧くなっちゃったけれど、ここだと思つて落着いて、秘書だと言つてやった。」

「うまく化けたね、さあ、飯を食おう。」

「あたいね、何時も塩気のないものは厭なのよ、もつとおいしい物がたべたいの。たとえば、髪の毛みたいな、みじん子みみずね、あれをそろそろと食べてみたいのよ、たまにおじさま、溝に行つてすくつて来てちようだいよ。」



「きたない話をしなさんな。溝にしやがんでこの年になつてさ、みじん子がすくえるものか、考えてもごらん。」

「そいでなきや羽根のある小さい虫が食べたいわ、蚊みたいな※ぶよみたいな、ぴかぴかした羽根がおいしいのよ、舌のうえにへばりつくのがとても可愛くておいしい。」

「それ、何のまねをしているんだ。」

「これ、あたいのヒミツの遊びなのよ、こうやって藻を一杯あつめてまん円くして、その中からだごとすぼつとはいりこむのよ、眼の中がすっかり青くなっちゃって、硝子の中にいるみたいに、とても宜い気分なのよ、この中でヒミツをひらく。」

「どういうヒミツなんだ。」

「あたいだつてもともと女でしょう、子を生むまねもして見たいじゃないの。」

「あ、そうか。」

「はやく子どもが生みたいんだけど、もう、こんなに寒くなっちゃったから、生めそうもないわ、だから子を生むまねをして、遊ぶだけは藻の中でも遊んでみたいわ。」

「うれしそうだね。」

「卵をうんと産んでそれを毎日解らなくなるまで数えて見て、そしてその卵にからだを擦り寄せている気持ったらないわ。」

「金魚の子は可愛いね、きみのように大きくなると、憎たらしいところが出てくるけれど。」

「でも、あたいくらいにならないと、おじさまのお対手になれないじゃないの。あんまり小ちやいと眼の穴の中にでも落つこちそうなんだもの、人間つてとても大きいからナ、口のそばなんか危くて近寄れないもの、人間つて何故そんなにばかばかしく、大きい体からだをしているんでしようか。」

「これでも未だ僕は小さい方だよ、中には西洋人なぞ、二米メートルもある奴がいるよ。」

「あたいなぞ人間の親指くらいしか、ないわね。」

「きみから見たら図体が大きいんで、いくら驚いても驚き足りないだろうね。」

「おじさま、そろそろ今年の最後の虫を捕りに行きましようよ、

こおろぎなら、まだ、そこらに沢山鳴いているわ。」

「明日の晩行こう、昼間にきみが籠を買って置いてくれば、何時でも出掛けられる。」

「去年のこおろぎの眼ん玉なんか、すきすきになっていたわね、まるで石炭がらみたいになっても、まだ、生きているんだもの、」

「人間はそうはゆかない、」

「あたいだっていまに尾もひれ鰭も、擦り切れちやって、おしまいは、眼ん眼も見えなくなるでしょうね、それでも、生きていられるかしら。」

「さあね、」

「あたい、何時死んだって構わないけど、あたいが死んだら、おじさまは別の美しい金魚をまたお買いになります？　とうから気になっていて、それをお聞きしようと思つていたんだけれど。」

「もう飼わないね、金魚は一生、君だけにして置こう。」

「嬉しい、それ聞いてたすかった、あたい、それではればれして来たわ。何処にも、あたいのような良い金魚はいないわよ、お判りになる、おじさま。」

#### 四、いくつもある橋

「この頃、小母おばさまは些つとも、お歩きにならなくなったわね。」

「立つて歩くのが大儀らしい。膝ひざばかりで歩いている。」

「あたね、昨夜ゆうべ考えてみたんだけど、膝ぶくろを作つて膝にあてたら、どうかと思うの、でないとい間には、膝の皮が擦り剥むけて了うわよ。」

「膝ぶくろを着つけてもいいんだけど、よく、ほら、街なんかに足なえの乞食がいるだろう、あの人達がね、膝の頭に袋を嵌はめているのを思い出して厭なんだ。ぼろ布の厚あつぼつたい奴をくつ付けているのを見ると悲しくなる。」

「あたねも、そいを考えて見て、たまんなかった。歩けなくなつてから何年におなりになるの。」

「そうね、十九年になるかな。」

「十九年めに小母さまのお部屋がやつと、出来たわけなのね。」

「橋の上には何時でも乞食がくそのように坐つていて、足も腰も立たないんだ。僕は毎日家で見るとような光景が、橋の上にあるよ  
うな気がして通りすぎるんだが、それも、田舎にある橋なぞでは  
なくて、東京のまん中で見る橋なんだ、たとえば昔の数寄屋橋と  
いう橋はたまらなかつた。」

「あそこに、お乞食こもさんがいたの。」

「お天気さえ好ければ、きつといた、或る日は男、或る日は女と  
いうふうに、どれも足のきかない人達がいたんだ、そしてこのご  
ろは橋はないが、通るたびに眼に橋が見えて来て僕が彼処に坐り、  
また、僕の妻も、僕と交替に彼処に出ているよな気がして、あ

の橋があそこを通るたびに見えて来る、そして新橋の方に夕雲が  
ぎらついで、街は暮れかけていても、橋の上だけが明るく浮いて  
見えている。」

「おじさまったら、そんなふうになんか小説ばかり頭ん中で書いて  
いらつしやるのね。だって小母様が橋の上にお坐りになるなんて  
こと、ありえないことじゃないの。」

「人間は誰だつて彼処にいちどは、坐つて見る頭の向きがある。  
そうでなかったら、仕合せというものを認めることが出来ない訳  
だ。僕もあそこに何時だつて坐つて見るかくごはある。戦争中は  
みんな彼処に坐つていたようなもんだ。」

「じゃ、あたいは下水に流されてゆくのね。」



「きみは下水のお歯黒溝であぶあぶしているし、僕は橋の上で一錢呉れというふうに、一日呶鳴っているようなもんだ。」

「おじさまは仕合せすぎると、ぜいたくしたくなつて、お乞食さんのまねまでしたくなるのね。いやなくせね。」

「それを真向からいえるということも、ふてぶてしくて好いじゃないか。」

「橋というものは渡れば渡るほど、先には、もっと長いのがあるような気がするわね。けど、橋はみじかい程悲しくて、二三歩あるくと、すぐ橋でなくなる橋ほど、たまらないものないわね、あたいの池の橋だつて水の中から見上げていると、天までとどいているようだけど、先がもうないわよ。」

「<sup>マツチ</sup>燐寸箱二つつないだよな橋。」

「その橋の下を威張つてとおるたびに、橋は白つぽく長たらしく、僅かに日光をさえぎったところでは、この頃とても寒くなつて来たわ、水はちぢんで、ちりめん皺<sup>じわ</sup>が寄つて暗いもの、あたい、どうしようかと毎日よくよしているんだけど、おじさまだつて判つてくれないもの。」

「縁側にきみを入れる、用意がちゃんとしてある。」

「そうでもしてくださいさならなかったら、このままだと水は硬いし重くなるばかりよ。」

「おじさんのお膝においで。」

「ええ、あら、もう大工さんが登りはじめたわね。あたいね、大

工さんて、板や四角い木で字を書いている人だとおもうわ。床とこという字を書いているうちに床の間が出来上るし、柱という字を書くために柱はどうに建ってしまうし、大工さんだつて字書きとおなじだわね。」

「紙のようにかんたんんに木を折り畳んで、つかっている人なんだ。」

「きようはお二階のほうのお仕事ね。釘袋を下げ、そこに金槌のこぎりを入れ、そして鋸を腰にはさんでいて用意がいいわね。何処でも足がさわれば屋根の上までも、登って行けるのね、おじさまは登れないでしょう。」

「登るにも、眼が廻って登れない。」

「いい気味ね。あたいはきのう釘箱にあつた一等こまかい釘を、一本盗んでやった。見てみるとぴかぴか光つていて、無性にほしくなつて来るんですもの。」

「何にするの、釘なぞ盗んで。」

「何にもしないけど、ただ、ほしだけなの、ただほしいとだけ思う事あるでしょう。あれなのよ。」

「釘というものは妙にほしくなるもんだね。」

「あたね、あんなに沢山の材木がどこでどう使われるか判らないけど、もう、何処かに毎日つかわれていて、幾らも残っていないのに驚いちやつた。家を建てるということは細かい材木が一杯要るのね。そして何処にどの材木がいるかということをやんと、

一々細かい嵌め方も大工さんは知っているのね。一本盗んでやろうと見当をつけて置いた細い木も、何時の間にか、つかっていたわ、盗まなくて宜かった。」

「すぐ判つて了うよ、どんな小さい木でも、みんな頭に覚えてい  
るからね。」

「おじさま、あれ、目高が池から飛び出しちゃった、危い、危い、ちんぴらのくせに勢い余って飛び出すやつがあるものか、ほらね、酷かったでしょう、眼を白黒させているわ。」

「水をいれ過ぎたかな。」

「お池の岸まで、お水をびったり入れてあるからなのよ、それでは、ちよつとはねて見たくなるのね、おじさまが悪いんだ。」

「この頃目高の数がだいぶ、減つて来たようだ、ひよつとすると。」

「そんなにあたいの顔を、見ないでよ、そんなに食<sup>た</sup>べてばかりいはしないわよ、疑りぶかく見つめていらつしやる。」

「百尾もいたのに、もう、ばらばらとしかかないじやないか、総計、五十尾もいない。」

「あたい、食べはしないもの。とても、にがい味がしていて、頭なぞ目高のくせにかんかん坊主で硬いのよ、食べられはしない、ふふ、でもね、内緒だけど弱っているの、いただくことあるわ。」

「にがいのが美味しいんだろう。」

「うん、かんぞうがにがくてね、とても、わすられない美味しさ

だわ。」

「そこで一尾ずつ呑みこんだ訳だね、生餌だと、うんこの色も臭いもちがって来るんだ。」

「だんだん薬喰いをして置かなければ、寒さでからだが持たなくなるのよ、あれ食べたあと、からだ中が燃え、眼なんかすぐきらきらして来て、何でもはつきり見えて来るんだもの、おじさま、慍らないでね、時どき、いただかしてよ。」

「可哀そうになあ。」

「だっておじさまは、でかい、牛まで食べておしまいになるでしょう、牛はもうもう鳴きながら毎日屠殺場に、なんにも知らないで曳かれて行くんだもの、目高なんかと桁違けたいだわ、もうもうは、

殺されても、まだ、殺されたことを知らないでいるかも判らない、きつと、もうもうは、何時でも、昔の昔から何かの間違いで殺されているとしか考えていやしない。」

「もうもうも可哀そうだが、目高も可哀そうだ。」

「では、暢のんき気に、ぶらりぶらりと歩いている豚はどう。」

「あれもね、何とも言えない、みじめなもんだ。」

「これからは、もうもうも食べないし、ぶうぶうも食べないようにしませうね、せめて、おじさまだけでも、その気になつていらつしたら、牛も豚も、よく聞いて見ないと判ないけど、うかぶ瀬があるような気がするわ。」

「うむ。」



「とうとう今年はあたひ、子供を生もうと願ひながら、産む間がなかつた。ね、何とかしておじさまの子を生んでみたいわね、あたひなら生んだつていいでしょう、ただ、どうしたら生めるか、教えていただかなくちや、茫ぼんやりしては生めないわ。」

「はは、きみは大変なことを考え出したね。そんな小さいからだをしていて、僕の子が生めるものかどうか、考えて見てご覧。」

「それがね、あたひは金魚だからよその金魚の子は生めるんだけど、おじさまの子として育てればいいのよ、おじさまはね、毎日大きくなつたあたひのお腹を、撫でたりこすつたりしてくださるのよ、そのうち、あたひ一生懸命おじさまの子だということを、心で決めてしまうのよ、おじさまの顔によく似ますように、毎日

おいのりするわよ。」

「そして僕のような凸凹面の金魚の子に化けて生れたら、きみはどうする。」

「おじさまの子なら、似ているに決っている、人間の顔をした珍無類の金魚でございと、触れこんだら慾張りの金魚屋のお爺ちゃんかね、息せき切って買いに来るかもわからないわ。」

「そしたらきみは売る気か。」

「売るもんですか、だいじに、だいじにして育てるわ、みじん子食べさせて育てるわ。」

「みみずのみじん子食うのは、いやだ。」

「じゃ塩鱈しおたらはどう。」

「塩鱈のほうがいいね。」

「金魚の子つてのは、そりやあずきくらいの小ささで、そりや、可愛いわよ、まるでこれがおさかなとは思えないの小ささで、尾もひれも頭もあつて泳ぐの。でね、名前をつけなくちや。」

「そうか、金太郎とでも、つけますか。」

「もつと立派な名前でなくちや厭、金彦とか何とかいう堂々たる名前のことよ。」

「寛ゆっくり考えて置こう。」

「では、あたゐ、急いで交尾してまいります、いい子をはらむよう一日じゆう祈つていて頂戴。」

「あ、」

「朱いのがいいんでしよう。金魚は朱いのに限るわよ。黒いのは陰気くさいから、例によつて燃えているたくま遅しいやつを一尾、つかまえるわ。」

「しくじるな。」

「しくじるもんですか、炎のようなやつと、夕焼の中で燃えて取りくんで来るわよ。」

「おじさま、見てよ、木だの板だの、一つもなくなっちゃった。」  
「うむ。」

「どんな小さい板切れも、みんな、つかつたのね、覚えをしてあったものをみんな覚えのあるところに、嵌めこんで了っているわ。」

大工さんは大工さんという生きた機械なのね。」

「こまかいことでは、ふじづる藤蔓というものがみんな右巻きだということまで、知っているんだ。」

「じゃ豆だの、そいから草の蔓だのは、みんな右巻きになっているの。」

「左巻きはないらしいんだ。木の事では博士みたいな人達だ。」

「おじさま、お二階にあがって見ましよう。」

「上ろう。」

「あたい、今までに、お二階に暇さえあれば上っていたのよ、階段を一段ずつ上るのが面白いのと、それにお二階の畳の上に乗ったと坐っていると、誰も知らない遠い所に来たような気がしてい

て、ヒミツを感じていたわ、おじさまだつてあたいがお二階にいたことは、些<sup>ちつ</sup>とも、知らなかつたでしょう。」

「知らなかつた。」

「お庭の景色がずっと見渡せるし、その景色が大きくふくらがつて、拡がつて見えて来るのよ、けど、小母様はお二階にはあがれないわね。」

「上つても下りることが出来ないんだ。」

「あたいね、お二階にいと、飛び下りたり、つたつて廂<sup>ひさし</sup>からぶらんこして下りて見たくなる。」

「僕も柱づたいに、つるつると不意に下りて見たい気がする。」

「それに二階というものは、かなしいところなのね、階<sup>した</sup>下とは世

界がちがうし、階下のことが見えないじゃないの。」

「それは階下の人はどんなにあせつても、二階のことが見えないと同じもどかしさなんだ、階下と階上とで人間が坐り合っているも、この二人は離ればなれになっているんだ。」

「気が遠くなるような、難かしいお話なのね。」

「その内に二階の人がいなくなれば、それきりで会わずじまいになる、次にまた別の人が来て二階に住んでも、例によって会わなければ何処の誰だかも、判らないことになるんだ。」

「二階の人は空ばかり見ているが、階下の人はお部屋にいても、空は見る事が出来ないとおっしゃるんでしょう。」

「そうだよ、階下と階上では大きなちがいだ。」

「何だかお話が判らなくなつて来たじゃないの、お二階の人はどうして階下したの人と、お話しないのでしょうか。」

「二階にいるからなんだ。」

「階下したの人は階下したにいるからなんでしょうか。」

「そうだよ、幾ら言つても同じことなんだ、問題は階上うえと階下したのことなんだよ。きみなら、ちよろちよろと泳いで階下まで行くが、人間はそうは簡単にゆかない。」

「よしませう、こんな、めんどろ臭い彼処此処廻つていようなお話は、幾ら言つてもおなじことなんだもの。」

「同じことじゃないよ、大きなちがいだ。」

「まだ言つていらつしやる。それより、もつと吃驚するようなお



話してあげましょうか、ゆうべね、おじさまのお書斎からかえつて、また、このお二階にあがろうと、階段からあがって行つて襖ふすまをあけますとね、外の明りがさしている中に誰か人がいるじやないの、坐つてて、何にもなんしないで、ぽかんと膝のうえに手を乗せているの、あたゐ、襖をほそ目にあけてみると、ふつと、その人がゆつくりと此方に顔をお向けになつた。」

「きみは何時でも、そんな話ばかり見附けているんだね、僕よか余程へんなところを沢山に持つている。その人は一たい誰だというの、そんな人なんかちつとも僕にはめずらしくない、僕にはいゝんな女でも、人でも、何時でもふらふら出会わしているんだ。」

「では、話するのやめるわ、今夜も来るかも知れないから、そつ

と此処に来ていて見ようか知ら。」

「さあ、日が暮れたから、下りよう。」

「え、階段ですれちがいに上つて来る人がいるかも知れないわ。

しかしおじさまには見えはしないわよ、人間の正気にはね。」

「ばかをいうなよ。」

「気をつけてね、すべるわよ。」

「うん、誰も上つて来ないじゃないか。」

「おじさまに、それが判るもんですか。ほら、いま、おじさまはくさめ嚏をなすつた、ぞつとお寒気がしたのでしよう、ほら、ほら、な

んだか、すうとしちやつた。」

「何を見ているんだ。」

「お二階に誰かが上ったような気がするもんですから、おじさま、障子はしめていらしたわね。」

「うん、だが、わすれたかも知れない。」

「おじさま。」

「何だ、お腹なんか撫でて。」

「あのね、どうやら、赤ん坊が出来たらしいわよ、お腹の中は卵で一杯だわ、これみな、おじさまの子どもなのね。」

「そんな覚えはないよ、きみが余<sup>よ</sup>処<sup>そ</sup>から仕入れて来たんじゃないか。」

「それはそうだけれど、お約束では、おじさまの子ということになってる筈なのよ、名前もつけてくださったじゃないの。」

「そうだ、僕の子かも知れない。」

「そこで毎日毎晩なでていただいて、愛情をこまやかにそそいでいただくと、そっくり、おじさまの赤ん坊に変わってゆくわよ。」

「どんな金魚と交尾したんだ。」

「眼のでかい、ぶちの帽子をかむっている子、その金魚は言ったわよ、きゆうに、どうしてこの寒いのに赤ん坊がほしいんだと。」

だから、あたい、言つてやったわ、或る人間がほしがっているから生むんだと、その人間はあたいを可愛がっているけど、金魚とはなんにも出来ないから、よその金魚の子でもいいからということになったのよ、だから、あんたは父親のケンリなんかいいわ、と言つて置いてやった。」

「そいつ、慍ったろう。」

「慍って飛びついて来たから、ぶん殴ってやった、けど、強くてこんなに尾っぽ食われちゃった。」

「痛むか、裂けたね。」

「だからおじさまの睡で、今夜継いでいただきたいわ、すじがあるから、そこにうまく睡を塗ってペとペとにして、継げば、わけなく継げるのよ。」

「セメダインではだめか。」

「あら、可笑しい、セメダインで継いだら、あたいのからだごと、尾も鱭も、みんなくつついてしまうじゃないの、セメダインは毒なのよ、おじさまの睡にかぎるわ。いまからだって継げるわ、お

夜なべにね。お眼鏡持って来ましようか。」

「老眼鏡でないと、こまかい尾っぽのすじは判らない。」

「はい、お眼鏡。」

「これは甚だ困難なしごとだ、ペとついていて、まるでつまむ事は出来ないじゃないか。もつと、ひろげるんだ。」

「羞かしいわ、そこ、ひろげるなんて仰有ると、こまるわ。」

「なにが羞かしいんだ、そんな大きい年をしてき。」

「だって、……」

「なにがだってなんだ、そんなに、すぼめていては、指先につまめないじゃないか。」

「おじさま。」

「何だ赦い顔をして。」

「そこに何かあるか、ご存じないのね。」

「何って何さ？」

「そこはね、あのね、そこはあたいだちのね。」

「きみたちの。」

「あのほら、あのところなのよ、何て判らない方なんだろう。」

「あ、そうか、判った、それは失礼、しかし何も羞かしいことがないじゃないか、みんなが持っているものなんだし、僕にはちつとも、かんかくがないんだ。」

「へえ、ふしぎね、人間には金魚のあれを見ても、ちつとも、かんかくが生じないの、いやね、まるで聾みたいだわね、あたいだ

ちがあんなに大切に守っている物が、判らないなんて、へえ、まるで嘘みたいね、おじさまは嘘をついていらっしやるんでしよう。シンゾウをどきどきさせている癖に、わざと平気をよそおうているのね。」

「うむ、そういうのも尤ももつとだが、きみだちの間だけで羞かしいことになっていても、僕らには何でもない物なんだよ。」

「人間同士なら、羞かしいの。」

「そりや人間同士なら大変なことなんだよ、お医者でなかったら、そんなところは見られはしない。」

「分らないな、人間同士の間で羞かしている物が、金魚の物を見ても、何でもないなんてこと、あたいには全然わかんないナ



」。

「金魚は小ぢやいだろう、だから、羞かしいところだか何だか、判りっこないんだ。」

「お馬はどうなの。」

「大きすぎて可笑しいくらいさ。」

「じゃ人間同士でなかつたら、一さい、羞かしいところも、羞かしいという感覚がないと仰有るのね。」

「人間以外の動物は人間にとつては、ちつとも、感じが触れて来ないんだ、まして金魚なんかまるでそんな物があるかないかも、誰も昔から考えて見たこともないんだ。」

「失礼ね、人間ってあんまり図体が大きすぎるわよ、どうにもな

らないくらい大きすぎるわ、金魚のように小さくならないか知ら  
い。」

「ならないね。」

「でも、おじさまとキスはしているじゃないの。」

「きみが無理にキスするんだ、キスだか何だか判ったものじゃない。  
い。」

「じゃ、永い間、あたいを騙だましていたのね、おじさまは。」

「騙してなんかいるものか、まア型ばかりのキスだったんだね。」

「じゃ、そろそろ、尾っぽの継ぎ張りをやろう。もつと、尾っぽを  
ひろげるんだ。」

「何よ、そんな大声で、ひろげろなんて仰有ると誰かに聴かれて

しまうじゃないの。」

「じゃ、そつとひろげるんだよ。」

「これでいい、」

「もつとき、そんなところ見ないから、ひろげて。」

「羞かしいな、これが人間にわかんないなんて、人間にもばかが  
沢山いるもんだナ、これでいい、……」

「うん、じつとしているんだ。」

「覗いたりなんかしちや、いやよ。あたい、眼をつぶっているわ  
よ。」

「眼をつぶっておいで。」

「おじさまは人間の、見たことがあるの。」

「知らないよそんなこと。」

「じゃ外の金魚の、見たことある。」

「ない。」

「お馬は。」

「ない。」

「くじらというものがいるでしょう、あのくじらの、見たことおありになる。」

「くじらのあれなんてばかばかしい。」

「人間がほかの動物に情愛を感じないなんて、いくら考えても、本当と思えないくらい変だナ。」

「きみはたとえば鮒ふなとか目高とかをどう思う、目高は小さすぎる

し、鮒は色が黒くていやだろう。」

「いやよ、あんな黒ん坊。」

「それじゃ僕らと同じじゃないか。」

「そうかな、目高はちんちくりんで間に合わないし。」

「金魚は金魚同士でなくちや、何にも出来はしないよ。」

「そういえばそうね。」

「うまく尾が継げたらしいよ。」

「眼を開けていい。」

「いいよ、尾を張って見たまえ。」

「ありがとう、ぴんと張って来て泳げるようになったわ。おじさ

まは相当お上手なのね、どうやら、彼処此処のぶちの金魚を騙しだま

て歩いているんじゃない？ 尾のあつかい方も手馴れていらつしやるし、ふふ、そいからあの、……」

「あ、<sup>つか</sup>捉まえた、田村のおばさま、きようは放しませんよ、きようで三日もいらつしつていらっしゃるんじゃない？ あたい、ちゃんと時間まで知っているんだもの。きのうも五時だったわ。」

「ええ、五時だったわね、五時という時間にはふたすじの道があるのよ、一つは昼間のあかりの残っている道のすじ、も一つは、お夕方のはじまる道のすじ。それがずっと向うの方まで続いているのね。」

「そのあいだを見きわめていらつしやるんでしよう、きつと、誰

にも見られないように、でも、あたいには、それが見えてくるんですもの。」

「あなたの眼にはとても適かなわないわ。石の塀の上にはいらつしやるのが、遠くからは、朱い球になっていて見えている。」

「潜り戸からおはいりになってよ、おじさまもいらつしやいます。退屈してぼうつとしているわよ、何時でもお夕食前なんだか、ぼうつとして気味のわるいくらい黙りこくっているわよ、ゆり子おばさまの来ることを知っているのか知らと思うことがあるわ。知っていて黙っているのか知ら？」

「些ちっとも、ご存じがないのよ、お夕方つていうのは、誰でもだまっていたい時間なのよ。」

「きのうもおばさまの話をしたけれど、ふんと言ったきり後にはなんにも、言わずじまいよ。だから、あたい、お腹が空いているんだと勘ちがいしたんですけれど、余りおあがりにならなかつたわ。」

「ほほ、お腹が空いたなんて面白いこと仰有るわね。」

「まあ、おばさま、変にお笑いになつちや厭。どうしてそんな声でお笑いになるの。」

「べつにわたくし変な声でなんか、とくべつに、笑わないんですけれど、……」

「だって寒気がしてくるわよ。さあ、おはいりになつて。」

「きようはいけないの、お使いのかえりなものですから、すぐ戻



らなきやならないのよ。」

「誰のお使いなのよ、誤魔化したってだめ。」

「まだお買物があるんですから、それから片づけなくちゃ。」

「じゃ、あたかも一しよにお供するわ。離れないでついてゆくわよ。」

「いらつしやい、あなたのお好きな物、何でも買ってあげるわ。」

「おばさま、じゃ金魚屋に寄って頂戴、うちの金魚にたべさせる餌を買っていただきたいの。」

「冬なのに、金魚屋のお店なんかあるかしら。」

「いえ、金魚の間屋のお爺ちゃんの家によければ、何時だつてあるのよ。」

「問屋は何処にあるの。」

「あたい、ちゃんとそれを知っている、マアケツトの裏長屋の二軒目で、おばあちゃんが古綿の打直しをしているんだから、綿打直シの看板を見てゆけばすぐ判るわ、おじいちゃんはそのこに冬越しの金魚と一しよに暮しているの。えびを挽ひいて糠ぬかをまぜた餌を一日作っているわ。」

「行ったことあるんですか。」

「ええ。」

「まあ、羞かしそうに顔をかくそうと、なさるわね。」

「いやよ、そんなに顔ばかり見ちや。あたい、あんまり度たび餌を買いにゆくもんだから、お爺ちゃんと仲よしになっちゃったん

です。」

「そお、あそこの床の低いお家でしよう、古綿打直シ、ふとん縫いますって、看板出ているところでしょう。」

「ええ、おばさま黙っててね、あたいたい、お爺ちゃんとお話しますから。」

「はい、はい。」

「お爺ちゃん、今日は、きようは冬越しの餌を買いにきたのよ、もうすっかりお挽きになったの。」

「おう、三年子、どうしたい、きようはべらぼうに美しい女と一緒だなあ、おめえも、えらく大きくなって別嬪べっぴんになったもんだ、もうおめえも来年は四年子だ、四年子は化けるといふぜ。」

「もつと低声でお話するものよ、あの方に聴えるじゃないの、きようはうんと餌を仕込みに来たのよ、お金はあのおばさまがみんな払ってください。」

「おめえは何時でも金持と一緒にいいなあ、うんと、買ってくれ、冬場は目高一尾だつて売れはしないんだ。」

「じゃ十箱ほどいただくわ。」

「おいおい、三年子、十箱で幾らになると思うんだ、千二百円もするんだぜ。」

「いいわよケケケチしないですよ、田村のおばさまがみな払ってくださいるわ、それに、金魚藻をどつきり包んでね、ほかに、今年のだべおさめに、みみずのみじん子を缶詰の空かんに一杯入れて頂

戴、久しくいただかないから、どんなに美味しいでしょう。」

「おめえはみじん子が好きだったな、これはお負まけにしとくよ、けどなあ、三年子、おめえのような仕合せな金魚は、この年になるまで未だ一度も見たことがない、永い間この商売をしているけれど、病氣もしないで何時もおめかしして歩いているのは、まあおめえくらいなもんだ。」

「美しからざれば人、魚を愛せずだわよ。」

「ときにおめえ、これじゃねえか。」

「ええ、お腹が大きいよ、卵がぎつちり詰っている。お腹がぴかぴかして光っているでしょう。」

「どうだい、おれの家で産んでくれまいか、おめえの子なら、

きつと、仕合せの好い子が生れるに決っている。」

「だめ、だめ、先約済みなのよ。」

「どうしてき。」

「子供をほしがっている人間がいるのよ、だから、冬ぞらだけど、生むことにしたのよ。」

「人間がかい。」

「うん、あたいを大事にしてくれる人がいるの。」

「余程の金魚好きなのなんだな、じゃ、冬の間はからだに気をつけてな、来年の春また思い出したら来てくれ。」

「おじいちゃんもお年だから、杖でもついて気をつけてね、あま  
り焼酎をおあがりになると、お腹が焼けてくるわよ。」

「うん、判った。」

「さよなら、あたいの育ての、二人とない大事なおじいちゃんよ。」

「卵から育てた生きのよい、お化けの三年子よ。」

「あの金魚屋のおじいちゃんは、とても、好いお人でしょう。」

「好い方ね、あなたの何に当る人なの。」

「そうね、しんせきみたいな人か知ら。」

「だってしんせきって変ね、ただの金魚屋さんなんでしょう、何の関係のない方なんでしょう。」

「ええ、それはそうなのよ、けど、こんなお話よしましょう、それよりお帰りにちよつと寄って、おじさまにお会いになって頂戴、

でなかったら、折角いらっしつたのに詰んないじゃないの。」

「けど、これから、お買物をしなきゃならないの。」

「じゃ、お買物を先になすつたらどう。」

「ええ、そうね。」

「何をお買いになるんですか。」

「お野菜なだけけれど。」

「そこのお店にはいりましょう。百合根の球があるし、ほうれん草はいらないんですか。」

「もやしがいいわ、それから細葱を少しに黄色い蜜柑。」

「あら、厭だ、もやしをお買いになるの、白っぽくて蛆うじうじしていて厭ね。それに細葱ほそねぎって、糸みたいで気味がわるいわ。おば



さまは変なものばかりお買い物になるのね。」

「あなたは何がいるの。」

「あたいはと、そうね、そうめんにしようか知ら。」

「そうめんて長くて、変に曇つていてきらいだわ。」

「冬、たべる物のない時に、たべますのよ。」

「上山さんもおあがりになるんですか。」

「おじさまは長細いものは何でも大嫌い、そうめんでも蛇でも、きらいだわ。」

「蛇でも、」

「ええ、冬は蛇がいなくなるから、いいわね。あゝ、も来ちやつた。ちよつと俵<sup>ま</sup>つてて、おじさまがいるかどうか見るから。」

「危いじゃないの、塀に登ったりなんかして？　まるで男みたいな方ね。」

「いるいる、また、何時もみたいにはかんとしている、きつとお腹が空いているのよ、空いている時には、いつも、きつとあんな顔をしている。」

「じゃ、わたくしこれで失礼するわ。」

「何おつしやるのよ、お這入りになる約束じゃないの、きようは帰しはしないから、幾らでもだだをこねるがいいわ。」

「これから帰ってお食事のしたくもしなければならぬし、お洗濯の取り入れもわすれていたのよ。」

「お食事のしたくって、誰のしたくをなさるのよ、おばさまは、

お一人で暮しているんでしょ。」

「ええ、わたくしの食事のことなのよ。」

「だったら、おじさまと久振りでご一緒にお食事なさるがいいわ。」

「その他にも用事があります。」

「何もご用事なんか、あるもんですか。」

「お洗濯物の取り入れがあるのよ。」

「洗濯物なんかお帰りになってからでもいいわ、さあ、這入りましょ。」

「ほんとにきょうはだめなのよ、急ぐ用事が一杯たまっているんですもの。」

「おばさまのばか。」

「何ですて。」

「ばかだわ、お会いしたくて前をぶらぶらしているくせに、いざとなると、びくびくして避けているじゃないの。そんなに厭だつたら、初めっから来ない方がいいのよ。」

「まあ、酷い。」

「何時だって現われると、すぐ逃げ出してしまいうくせに、何のために現われるのよ、そんなのもう古いわよ。」

「だつてご門の前に、ひとりでに出て来てしまふんだもの。」

「嘘おつしやい、自分で五時という時間まで計つて来ながら、お洗濯物の取り入れも、何も無いもんだ、一緒にきようはお家には

いるんですよ、でなきや、手に噛みついてやるわよ。」

「怖いわね、何とおっしやっても、わたくし帰るわよ。」

「帰すもんですか。」

「手、痛いわ、何てちからがあるんでしょう。」

「噛みついたら、もつと痛いわよ。」

「じゃね、わたくし顔をなおします、だから、あなたの口べにと、クリームを貸して下さい、お池のそばでちよつと化粧を直すわ。」

「その間にずらかるお心算つもりなんでしょう。」

「ずらかるなんて口が悪いわ、そんな人の悪い事はしません、柿の木の下でじつと俵っているわよ、白粉も持って来て頂戴。」

「ええ、だけど心配だ、おばさま、お金のはいっているハンド・バッグをお預りするわ、ずらからない証拠にね。」

「はい、ハンド・バッグ。」

「じゃ、すぐ急いで取って来るわ、ほんと何処にも行かないでね、おじさまにそう言つとくから、きようはじめてお食事するといつたわね、あたい、嬉しいわ、おじさまもきつと、ほくほくなさるわ。」

「これも、ついでに、お料理してね。」

「百合根、いただくわ、もやしは厭よ。じゃ、すぐ戻るわ。おばさま、もう、白椿が咲いているからお剪きりになつていいわよ、とてもいい匂いだから、俟かっている間にかいいでいらつしやい。」

「ありがとう。」

「くらいから街灯点けて置くわ。」

「おじさま只今。」

「何処に行っていたんだ、化粧道具なんか持っていない時分何処に行くんだ。」

「いい人が来ていて、おじさまにお会いするために顔をなおすと仰有っていらっしやるのよ、だから、お化粧道具を持ってゆくんです。」

「いい人って誰なんだ。」

「当てて見てよ、当るかナ、」

「じらさないで言っごらん。」

「田村ゆり子。」

「いま時分に、どうして君はあの人に会ったのだ。」

「お家の前でおあいして、一緒に買物をしてこれから一緒におじさまと、お食事のお約束したのよ。」

「うむ。」

「いやにれいたんな顔附ね、ご一緒におあがりになるんでしよう。」

「約束なら仕方がないが、いまごろどうしてうろついているんだろう。すぐ逃げ出すくせに。」

「きようは大丈夫、ハンド・バッグ預っちゃった、何処にも往か



ないで俟っている証拠なのよ。」

「見せてみたまえ、」

「古い型だわね、二十年も、もっと以前の流行らしいのね、下げ紐ひもがついてないし、口金がみんな錆びさびついている。こんな古風なバッグ提げるの極りわるくないかしら。」

「中を開けてごらん。」

「人様の物を開けるの悪いじゃないの、おじさまらしくないこと仰有るわね。」

「まあちよつと開けて見たまえ。」

「開かないわ、錆びさびついているのよ、ええ、ぎゅつと振ねじつて見るわ、やっと開いたけど、手巾とバスの回数券と、それに香水の瓶

がはいっているきりよ。」

「バスの回数券があるの、ふうむ。」

「何処かにお勤めになっていらっしったのね。」

「さあ、どうかな。」

「どうして回数券なんか、要るんでしょうか。」

「よく見たまえ、この回数券は戦前もずっと前の、藍<sup>あいいろ</sup>色の表紙  
じゃないか、あと三枚きりしかない。こんな物いまだき通用する  
もんかね。」

「あきれた。」

「くわせものだよ、きみが勝手に作り上げたおハナシなんだ。お  
よし、こんな事を企んでおじさんを困らせるのはお止し。」

「だってあたゐ、實際、田村さんの手をうんと握って見たもの、講演会の時よりか、ずっとふとつていたわ。」

「庭で俟っているの。」

「そんな約束なのよ、きようは間違いはないのよ、あたゐ、騙されるのいやだから、先刻ね、手を痛い程握ったときに髪の毛を二三本噛み切ってやったわ、ほらね、これ、本物の髪なんでしょう。」

「髪だね。」

「でも、人間の髪にまちがいないでしょう、つやといい、ウエーヴのかかっている工合といい、……」

「ウエーヴがかかっているな、併し古いあとだね、」

「おじさま出て見ましようよ、お迎えしておあげしたらお喜びになるわ、ご門のきわにいらっしやるんです。」

「いや、僕はここにいるよ。」

「ちよつとくらい出たつていいじゃないの、意地悪いわないで、さあ、どっこいしよと、立つのよ、どっこいしよと、……。」

「僕は寒気がしているから出ないよ、きみ、往つて連れて来てくれたまえ。」

「出たくないんですか。」

「うん、出たくない。」

「こんなにお頼みしてみても、だめなの。」

「気が重いんだ。」

「冷酷無情な方ね。」

「冷酷でも何でもいいよ。」

「おじさまのバカ、バカヤロ。」

「ばか、だど。」

「バカだわよ、わずかに庭にも出てやらないなんて、そんな酷い仕打ちがあるもんか、二日も三日も遠くから通っている人にさ、ちよつとくらい、出てあげてもいいじゃないの。」

「何とでも言いたまえ、きみが呶鳴ったって屁でもない。」

「じゃ本物の人間でないとはいいたいんでしょう、だから、会う必要はないというのね。」

「よくそこに気がついたね、あれは本物の女ではないんだ、きみ

が金魚屋に行く途中で田村ゆり子のことを、考えながら歩いて、  
遂々、とうとう本物に作り上げてしまったのだ。」

「じゃ、何時か街の袋小路の行停まりで見たときも、あたいのせいだと、仰有るの。」

「あの時は僕ときみとが半分ずつ作り合わせて見ていたのだ、だから、すぐ行方不明になって了った。人間は頭の中で作り出した女と連れ立っている場合さえある。死んだ女と寝たという人間さえいるんだ。」

「それはユメなのよ。」

「ユメの中で男と逢った女で、はら孕んだ例は沢山にあるんだ。」

「おじさまのバカも無限なバカになりかかっているわね、後生だ

から庭にだけでも出て見て頂戴。」

「しつこい出目金だ。」

「出目金とはなんです。あたいが出目金ならおじさまは何だい、死に損ったふらふらお爺ちゃんじゃないの、あたい、往つてあんな死に損いなんかに会わないで、帰っていたたくようにいうわよ。」

「ついでに、もう来ないでくれと言ってくれ。」

「会いたいくせにそれを耐えて、いらいらしていてそれが本心だというの、会いたくても飛び出せもしないくせして、意気地なしね、うそつきなのね、両方で同じことを言っているんだ、おばさまはおばさまで逃げ廻っているし、此方は此方で逃げを打つ

なんて、揃って人間なんて嘘のつき合いをしているようなもんだ。人間なんて生れてから死ぬまで、嘘の吐き合いをしているようなもんだ。」

「死んでいても、まだ嘘をついているかも知れないさ。嘘ほど面白いものはない、」

「じゃ、勝手に嘘をついていらっしやい。あたい、おじさまつてもっと女のところが判る方だと思つていたら、ちつとも、判つていない方なのね、こまかい事なんかまるで判つていない、……」

「女のところが判るものか、判らないから小説を書いたり映画を作ったりしているんだ、だが、ぎりぎりまで行つてもやはり判つていない、判ることはおきまりの文句でそれを積みかさねている



だけなんだ。」

「もうそんなお話、聴きたくないわ、何時でも同じ事ばかり仰有つている、よく飽かないで言えるわね。」

「言ったことを何時も繰り返して言つては、人間は生きているんだ。」

「あら、誰かがあたいを呼んでいるんじゃないか知ら、黙つて、ほらね、聴えるでしょう、おばさまが呼んでいるのよ、おじさまにはあのお声が聴えないの。」

「誰の声もしてはいないじゃないか、金魚の空耳という奴だよ。」  
「いいえ、すぐ門のわきにいらつしやるんだけれど、それにしては遠い声だわね、ほら、また、きれいな声で呼んでいる。」

「きみはすっかり何かに捲き込まれているね、少し変になっている。」「

「おばさま、いま行くわよ、すぐ、行くわよ、おばさま。」

「そんな大声を出すと、家の人みんな吃驚するじゃないか。」

「ほら、お答えになったわ、はやく、いらっしやいてね、あの声が聴えないなんておじさまこそ、そろそろお耳が遠くなっている証拠だわ。」

「きみに聴えていて僕に聴えない場合だつてある。とにかく、そんな女なんかはもう門の前にも庭の中にも、俵つていはしないよ。」

「薄情なおじさまと違うわよ、ちゃんと俵つていらっしやるから、

お約束だもん。」

「早く往つて見たまえ。」

「早く往こうが遅く往こうが、あたいの勝手だわ、おじさまなんか、いやな奴には、もう、構っていらぬ。」

「いよいよ、ふくれて来たね。」

「明日から何もご用事聞いてあげないから、かくごしていらつしやい。威張つたつて碌ろくな小説一つ書けなくせに、ふんだ。」

「あら、おばさまがない、おばさま、何処なのよ、まあ、そんな処かに躑躅がんでいらつしたら、わかんないじゃないの。」

「あなたお一人？」

「おじさまは出て来ないのよ、おばさまがきつとお帰りになつて  
いると、思っているのよ。」

「わたくしもいま、帰ろうとしているところなんです、いろいろ  
有難う、じゃ、もう帰らしていただくわ。」

「だってそんな、……おじさまはお会いしたいくせに、わぎと、  
冷然としていらつしやるのよ、あたい、喧嘩しちやつた、明日か  
らは一さい合財がっさいご用事してやらないつてね。」

「困るわ、わたくしのためにそんなこと言つたりして。」

「何だか本当はお会いするのが怖いらしいのよ、煙草を持ってい  
る指先の顫えを見せまいとして、手を動かして誤魔化していたわ  
よ。」

「どうしてでしょう。」

「ときにおばさま、右の手をちよつと見せて。」

「何なの。」

「まあ、まだ腕時計をねじ取ったあとがのこっているわね、この傷痕どうして永い間治らないのでしょうか、これ、おじさまの仕業じゃないわね。」

「ちがうわよ、他の別の人、」

「一たい誰なの、お時計盗んだやつ。」

「それはいえませんが、知っている人なんです。」

「きつと、以前おばさまにお時計を買ってくれた人でしょう、その人が訪ねて来た時に、おばさまはどうに死んでいた。そしてそ

の男が出来心だか何だかわかんないけど、力一杯に手頸から時計をもぎ取って逃げ出したのね、おばさまの死んだことなんぞ、どうでも宜よろかったのね、ただ、時計がきゆうにはしくなつたのね。」

「あなたは探偵みたいな方、その男がわたくしの死顔も見ないで、その足で別の女の所に行つて兼ねて約束しておいた時計だと言つて、それをやったのよ、女は嬉しがり男はいい事をしたと思つたのでしょう。」

「その男つておばさまの、好きな人だったの。」

「まあね、引き摺られながらも、いやでも、そうならなければならぬ場合が、わたくしにもあつたんですもの。」

「おじさまは、その方の事を知つていらした？」

「ごぞんじなかつたわ。」

「おばさまはその人の事を隠して、言わなかつたのでしよう、おじさまに厭な思いをさせたくなかつたのね。」

「いえ、わたくしの事は何もお話したことがないし、お尋ねもなさらなかつた……ただ、何時も見られているような気がしていたけれど、また何時もなにも無関心のご様子でもあつたわ。」

「その時計を盗んだ方、憎らしいとお思になる？」

「それほどでもないけど、男という者はみんなそうなのよ。」

「じゃ今頃、何処かの女の手頸にお時計がはめられているのね、いやね、死人の手頸からもぎ取つた時計をはめているなんて、その女の人、おばさまご存じ？」

「一緒にはたらいっていた事があったから、知っているわ、性質のいい人なのよ、だから騙されやすく、騙されるのが嬉しかったのでしょう、そういう女だつて沢山いるのよ、世間には。」

「騙されていながらそれが嬉しいことになるのか知ら、あたいはそれがよく判らない。」

「騙されるということは、気のつかない間は男に媚びているみたいなものよ、気がつく、がたつと何処かに突き墮おとされた気がしてしまふんです。」

「おばさまも突き墮されたのね。」

「ええ、では、もう暗くなつたから、そろそろ行きましょう、もうこれで再度とお目にかかることもないでしょうから、あなたも



寒い冬じゆう気をつけてね。」

「も一度おじさまを呼んで見るわ、あたいの呼ぶのを俟っているかも知れない。」

「呼ばないで頂戴、ね、呼ばないで。」

「ちよつと俟つてよ、ちよつと、些<sup>ほ</sup>んのちよつと俟つて。」

「では、また。」

「おじさま、おばさまが帰るから、すぐ、いらつしつてよ、おじさま。」

「そんな大きな声をなさると、近所のお家に聴えるじゃないの、お呼びになるとわたくし足が竦<sup>すく</sup>んで来て、きゆうに、歩けなくなるんですもの。」

「何しているんでしょう、まだ、何かにこだわってじつとして  
るのよ、出て見たくてならないくせに、何時もああなんだ、何を  
しているんだろう、ね、時計見ていてね、あと五分間俟って、五  
分経ったらいらしつてもいいわ、拜むから。」

「ええ、では五分、でも、出ていらつしやらないでしょう、こん  
なわたくしにお会いになるわけがないもの。」

「いま出ていらつしやるわ、きつと。あ、五分経つちやった。」  
「じゃ、わたくし、……」

「いいわ、お帰りになつてもいいわ。その道まっすぐだとバスの  
停留場が見えます。あ、それからおばさまのお持ちの回数券は戦  
争前の藍色券なのよ、あんな物、おつかいになれないからお気を

つけてね。」

「ぞんじています。」

「そお、じゃ、どうしてハンド・バッグに入っていたんです。」

「どうしてはいつていたのか、わたくしにも、よく判らないわ。でも、それはそつとして置きたかつたのよ。」

「そちらは反対の道路みちだわよ、其処にはもう人家がない、さびれた裏通りだもの。」

「ええ、」

「あら、其処は焼跡になつていて、街灯も点いてないのよ、道順教えておあげしますから俟っていて、水溜りばかりでとても歩けはしないわ。」

「ええ。」

「俵つていて頂戴、意地悪ね、きゆうにそんな早足になっちゃつて、ほら、見なさい、危いわよ、水溜りにはまっちゃつたじやないか、ちよつと立ち停つてよ、一と走りお家に行つて、懐中電灯持つて来ますから。」

「……………」

「俵つてと言っているじやないの。聴えないのか知ら、振り向きもしないで行つちやつた。」

「……………」

「おばさま、田村のおばさま。暖かくなつたら、また、きつと、いらつしやい。春になつても、あたいは死なないでいるから、五

時になったら現われていらっしやい、きつと、いらっしやい。」

## 後記 炎の金魚

「蜜のあわれ」の終りに、燃えながら一きれの彩雲に似たものが、燃え切って光芒だけになり、水平線の彼方にゆつくりと沈下して往くのを私は折々ながめた。こういう嘘自体が沢山の言葉を私に生みつけ、ついに崩れて消えるはれがましさを、払い退けられずにいたのである。七歳の少女が七歳であるための余儀ない遊びな

らともかく、私はすでに老廃、その廃園にある青みどろの水の中に、まだ盛りあがる囁たわごと言に耳をかたむけていたのである。

私は去年の夏のはじめ、一尾のさかなを買って町を歩いていた。こんな実際の事が私にありうることでない奇蹟の日を記憶させた位だ。暇のない人間にある不意の暇というもの程、複雑に細かくはたらく時間はない、この日から私はいろいろな言葉を拾いはじめ、実にばかばかしい多くの囁言にうつつを抜かしていたのである。その間じゅう私はそわそわとして機嫌が好かった。聡明な作家というものはこんな駄じやれや回顧を、何時も蹴飛ばして立派やかな材料と、つねに四つに取り組むのが本来の仕事なのである。危あぶなげ気のある仕事には作家は親しまないものだ。だが、不倖にも

私の中にあるインチキは、遂にいかなる巧みな完成を為し遂げようとしても、それはただの魚介を仮象としてごてつくばかりの世界に、ふらふら不用意にも迷い込んでいたのである。

私は嘗て詩を書いて売り飛ばしていた男であり、いまも古い詩をたのまれると臆面もなく書いている詩人くずれの男であった。だが感心なことには数百篇をこえる小説物語の中に、嘗て詩をはさみ込んだ例は二度くらいしかない、小説の構成のうえで詩を書き入れることは、物語にたるみを生じるし、詩の印刷の頭が低いから其処にある隙間が、或る場合には小説の行列をこわしてうおそれがあるからだ。だから私はずっとそれを避けていた。数行の詩の挿入ですらそうであるのに、この物語に詩を匂わそうとい



う意図は全然なかつた。寧ろ詩の感応や漂泊があやまつて現われ  
そうであつた時には、私はそれを現実に引き戻して極端に回避し  
ていたのである。

では、この物語は一体何を書こうとしたのか、という問題はこ  
れを書き終えてからも、私にあやふやな多くのまよいを与えた。  
読んだら判るじやないかと、そう言つて了えばそれまでだが、私  
自身にも何が何だか判らないのである。ただ、このような物語の  
持つ美しさというものは、どの人間の心にも何時もただようとい  
る種類のものであつて、それは特定の現身ではないのだけれど、  
どの人間にもふかく蔽<sup>はま</sup>り込んでいる妙な物なのである。或る一少  
女を作りあげた上に、この狡<sup>ずる</sup>い作者はいろいろな人間をとらえて

来て面接させたという幼穉ようちな小細工なのだ、これ以上に正直な答えは私には出来ない。

先にも述べたように、一尾のさかなが水平線に落下しながらも燃え、燃えながら死を遂げることを詳しく書いて見たかった。つまり主要の生きものの死を書きたかったのだが、そんな些事を描いても私だけがよい気になるだけで、誰も面白くも可笑しくもなからうと思つて止めた。小説家という者はつねに好い気な人間であつて、時に屢しばしば々これは面白いと勘違いをして冗くだらない事を長々と書く誤あやまちを何時も繰り返して、それにとつ掴まると、まんまとやり損うのである。

たとえば今日は気分が大変に悪い、どうにも、めまいがして遊

泳の平均した姿勢を失っていると彼女は言い、私はすでに紅鱗に褪色のある彼女を見て、どこかが悪いというより、これはもはや此のさかなの死期が来ていると思った。泳ごうとしながらきりきり舞いをし、少し泳いではばったりと泳ぎ停まり、腹を横にしてそのままにいるすがたを見たが、また、再び背<sup>せびれ</sup>鰭を立てようとして焦っても、その事はもう為し得なかつたのである。嘗てあなたは若しわたしが死んだら、その日から水ばかり眺めていらつしやるでしょうと彼女は言ったが、それは、そのような日が近づいていることが感じられ、よく見ると水には生氣のない重いよたよたした波が、彼女の周囲に鉛色の空を映して取りまいていた。もつとよく注意してみると、もはやお喋りも、顔をつくろうという動

いたものが見られなかったのだ、そこで勿論私は話しかけるとか、声で呼ぶとかをしなかった。あなたは死際の誰にでも冷淡でいらつしやる、それが老いた人間の習性だということを、私は彼女から聴いた覚えを思い返した。或る未亡人に私は或る日ふと言ったことがあつた。あなたは毎月のように友人のお通夜に行つたり告別式に詣つたりしているが、他人の死にはちつとも心を動かさなくおなりでしょうというと、そうです、わたくしは人が死んだその悲しみなどと対い合つていても、夫の死ですつかり悲しみははたいて了つていて、何もいまは残っていませんという返事であつた。私はそれも、もつとももの事に思つた。夫の死に行き会つた人は、人間の死の最悪の時期を経験しているから、いかなる悲しみ

もそれ以上に参ることはあるまいからだ。

或る若い婦人記者でその記者の仕事はまだどれだけでも経験していない人が、帰り際に靴を履くために腰をかがめ、そして靴を履いてしまった小さな支度を終った眼で、ひとあたり庭先の水のあるところを眺めて言った。

「おさかなはどこにも、いないようですが。」

婦人記者は私の長い二百枚もある、その物語を読んでいたのである。

「あれは、とうに死にました。」

「そお、それはお可哀そうなことをしました。」

われわれはじかに生き物に親しんでいる間、われわれと心が其

処に常住していることを疑わないために、屢々、その生き物に高度の愛情が蟠わだかまつていることに今さらに驚くことがあつた。私達のこの驚きはその生き物を喪つた時にはじめて領うなずける状態であつて、平常は何でもない普通の事に思われていた。つまり、われわれはたとえ対手がどういう種類の生き物であつても、その生態としてしく一緒にこれを眺めて暮していたということから、他の生き物と比較にならない近親感があつて、他人から見て実にばかばかしい可愛がり方を見せているものだ、或る一人の婦人を愛するという状態の男を、外から見る時には想像の出来ないこまやかさがあつて、これにはただ、そうかなあ、こういう事もあるのだという結論を出してその聖地から引き揚げる外はないのである。

「ひでえ風邪じゃねえか、それでよく春まで持ちこたえたものだ。」

小売商人の金魚屋の診察は、ただ、簡単にそういっただけであった。こんなの死んだら、また代りにどんな良いのでもいるからお飼いになるなら電話を下されば直ぐ持つて参りますと彼はいい、さかなも、こんなに裏返しになつて浮いて来たら、いくらわたくしでも手の付けようもございません、こいつは三年子でよく生きた方です、素人さんがお飼いになつたとしても、これ以上は持ちこたえることが容易ではないのです。病気の直接の原因はいわば睡眠不足というやつで、夜にお廊下にお入れになつた事はいいとしましても、障子越しの蛍光灯が夜おそくまで水の中に差しこん

で、さかなは何時もうつらうつらとしか眠れなかつたのが、死因といえは死因なんでしょうね、それに胃腸の方にもしこりがあつて固くなつています、こうなつたらご覧のとおりに肌の色が先刻とは、ずっと朱の色を失つて来ていますから、とても助かりようもございませんと言つて、彼は素気なくさつさと歸つて了つた。そして間もなく金魚は一塊の朱になり、それも次第に黄ろい濁りを鱗の間に融かして浮び上つて来た。

大抵、私は書きはじめると書き損じはしない方であつたが、それは原稿という紙を引き裂く鋭い音が何時も嫌いで、山を裂くように怖れたからだ。それが今日は殊更に頭に来て生き物の死に影響するような気がし、書き損じの原稿紙を四つに畳み、さらにそ



れを又四つに折って雑誌の間に片づけて了った。そして山を裂くような音響を封じたことが嬉しかった。

永い作家生活の中でも、ひよんな事から、妙にその作品が成功したとも成功しないとも限らないのに、頭にのこって自分だけがそれを大切にあつかう作品が二三篇はあるものだ、それを書いていた日とか、うごかない動機とかが一綴りの原稿のまわりにまで溢れていて、それを書くことや整えることも出来ないもやもやがあるものだ、人間がつくる霧みたいなものなのだ、凡そ人間の事で書けない筈がないのに、そのもやもやは書き分けられないのである。書くのに破廉恥な事とか、きまりが悪く、あまつたるい事とか、文章には表現出来ない顔や性質とか、そういう種類の物が

作家のまわりに霧や靄<sup>もや</sup>となり、もやもやになって何時も立ち罩<sup>こ</sup>め  
ている。それらは或る小説の或る機会にうまく融け合つてくれる  
もやもやなのである。このもやもやを沢山持ち其処から首を浮べ  
て四顧している者が、作家という者だと言えそうである。

このもやもやは「蜜のあわれ」にまだ豊富にあることで、もう  
私は沢山という気がした。そして当然ここでペンを擱<sup>お</sup>くべき日の  
来たことを知り、それにすら名残りが留められたのである。作家  
の慾はふかく実力はあさい、あさい才能の中で何時もどたばたす  
る自覚を失っていることでは、余計な作為が分不相応に自分の中  
に暴れ廻っていることも、冷やかに眺めて通り過ぎる者も作者な  
のである。作家というものの五体のところどころには不死身の箇

処があつて、幾ら年月が経つても死なない部分だけが、色を変えずにつやつやと生きている。それがどのように狭小な部体であつても、深度があり記憶は素晴らしい、へどもどして行き詰まるとそこを敲き<sup>たた</sup>さえすれば、扉はひとりで開き、中の物が見え聴える音は聴え、たすけを呼ばなくともたすけて呉れるのである。この痣<sup>あざ</sup>のような癌<sup>がん</sup>に似た不死身の一処をさすりながら、彼は生き彼は書き、ありもしない才華へのあこがれに悶えている残酷さである。

この解説のようなものを書き終えた晩、何年か前に見た映画「赤い風船」を思い出して、それを書きこむことを忘れないように心覚えをしてその晩は寝たが、翌朝になってすっかり忘れてし

まい、まる二日間思い出せなかった。今朝になつて漸と「赤い風船」の面白さを思い当てた。この映画のすじはわすれたが、貧しい一人の少年が坂上の人家の窓先から一個の風船を見つけ、それを失敬して持って逃げるのが物語の発端で、少年の往くところ風船がついて廻り、風船のあるところ町を往く少年のすがたがあった。最後に風船は悪少年共によつて野外で踏み潰されるが、併し別の風船が突然数十球のつながりになつて、町じゅうの少年等の持つ風船を集めて、碧藍へきらんの空に舞い上つて往くという物語であったが、総天然色の風船群が逆光の中にあざやかに空高く、高層の建物と次第にはなれてゆく美しい光景で、この映画は先の少年の嬉しさを取り戻して終りを告げていた。この「赤い風船」を見

た後に、こういう美しい小事件が小説に書けないものか知ら、何とかしてこんな一篇の生ける幼い愛情が原稿の上に現わせないものかと、一カ月くらい映画「赤い風船」に取り附かれ、ばかはばかなり、伶俐ぶった考えを持つとうとしていたが、悪小説家の悪癖は日を趁うて「赤い風船」の聖地から離れて往った。そして日々の忙殺は「赤い風船」の喜びもまた私の頭からあと形もなく飛散して了ったのである。

だが、私はついに「赤い風船」を今日思い当てて、いつぞや、こういう物が書きたい願いを持っていたが、お前が知らずに書いた「蜜のあわれ」は偶然にお前の赤い風船ではなかったか、まるで意図するところ些いささかかもないのに、お前はお前らしい赤い風船を

廻して歩いていたではないか、お前だって作家の端くれなら、或る日或る時にひよんな事から感奮して見た映画の手ほどきが、別の形でこんな物語を書かせていたではないか、一旦書いて見たいという考えを作家が持つということは、作家と名のつく人間にはいつかは仕事の上に、何等の覚性もなく、ひとりでにこんがり、色つやをおびて現われて来る機会があるのではないか、そしてその事が仕事が終わった時にやっぱり風船はとうに頭の奥ふかくに取りついていたことが判るのだ。心が覚えをこめていたということは大したことなのだ。そして私は愛すべき映画「蜜のあわれ」の監督をいま終えたばかりなのである。漸く印刷の上の映画というものに永年惹きつけられていたが、いま、それを実際に指揮を完

うし観客の拍手を遠くに耳に入れようとしているのである。

私は会話とか対話で物語を終始したことは、小説として今度が初めての試みであつて、一さいの野心も計画も持たなかつた。最初三四枚すらすらと書き上げ、それを心に反芻はんすうしているあいだに自然にこんな情景は、この形で踏むことが面白いという教えを自分自身の中から受け、また自然である気がして進行したのであるが、危あぶなげ気は百枚くらいに達して感じたものの、勢いとなめらかさは遂に説話体になり、それがたとえ失敗に終つても生涯に一度くらい失敗したつてよいという度胸を決めて了つたのである。私自身が些すこしでも気持よく書き分けられ、美しいものが作り上げられたら、それでよいという考えをもはや捨てることをしなかつ

たのだ。昔は親を殺したり主人をあやめたりする人間の名前の上に、悪という流けがれた文字をのつけて、その悪を死歿の後の刺冠しかんとしていた。悪七兵衛君、悪源太君もみなそういう武人であった。しかし女では悪・君子とか、悪・八重子などという刺冠の名前はない、悪小説家、悪作家という者がいたら、私など悪文のかんむりは疾とうにつけられているし、私自身も悪作家といわれた方がはるかに他の美名を貰うより潔い、だからこそ、この物語の穢ちき氣を自ら好むのである。そしてこれが悪作ならいよいよ悪作家と名附けられるべきである。煮ても焼いてもくえない悪作家という者は、見渡したところ何処にもいそうもない、そこに一人前に坐りこむのも小気味好い話である。



今日この原稿を綴<sup>と</sup>じて終り、ふと毎月「新潮」の竹山道雄氏の手帖を読む例にならつて、愛読の眼を凝らしてゆくと、「大宇宙の中で、われわれの生命は、（さながら大きな闇の中に弧をえがいて飛んでいく一つの火花のようなものだといったら、いちばん当っている。」）という数行に出会<sup>でくわ</sup>して、この原稿の最初に書いた私の二三行そっくりなのに、ひそかに驚いた。私は何時もこの遠くで消滅する光芒が絶えずキラめいていることを感じ、竹山道雄氏のそれもこの火花にカチ当てられたのである。偶然ではあるが、話のよく合う人と話をした数瞬を感じた。何十萬年来の人間の爪跡を尋ねている竹山氏の文献も、そしてたわいない私の文章の往くところも、一つの不死身の火を感じたことでは、同じ思い

が  
邂<sup>かい</sup>  
逅<sup>こう</sup>  
したわけである。

## 青空文庫情報

底本：「蜜のあわれ・われはうたえども やぶれかぶれ」講談社  
文芸文庫、講談社

1993（平成5）年5月10日第1刷発行

底本の親本：「室生犀星全集 第十一巻」新潮社

1965（昭和40）年1月10日発行

初出：「新潮」

1959（昭和34）年1月～4月

※「二、おばさま達」の初出時の表題は「おばさま」です。

※「四、いくつもある橋」の初出時の表題は「橋」です。

入力：日根敏晶

校正：江村秀之

2017年6月25日作成

2019年12月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。

# 蜜のあわれ

室生犀星

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>